

## 翻 訳

## 中国近代海軍の発展（1885～1894）

原書：John L. Rawlinson, *China's Struggle for Naval Development 1839-1895*, chap. VII & VIII, pp. 129-166, Harvard Univ. Press, 1967.

ジョン・L・ローリンソン  
訳：細見和弘

## I 北洋艦隊の出現

中国がフランスに敗れた結果、中国の指導者の中には、海軍の中央集権化が必要であると確信する者がいた。左宗棠は、単独で全国艦隊を率いる指導者の創設を求めた。その艦隊は、八つの沿岸基地を巡回する十の大艦隊から成っており、そのうち二つの艦隊は、西洋への出航を含めた移動任務を常時担うものとされた。<sup>1)</sup>この提議は、左宗棠が皇帝に別れを告げる挨拶となる長い建白書の一部である。左宗棠は、その建白書を書いて間もなく死去した。そして、海軍の中央集権化という考えは、他の後援者を見つけ出さなければならなかった。

戦時中に起こした不祥事の角で処罰されていた張佩綸は、それらの後援者の一人であった。彼は、「水師衙門」を要求した。フランス・ドイツ・イタリア・オランダ・オーストリア公使の許景澄は、西洋19箇国の海軍力に関する研究を宮廷に献上し、中央集権化も支持した。<sup>2)</sup>敗戦に促されて、宮廷は、総理衙門、李鴻章、醇親王奕譞に対し、これらの提議を検討するよう命じた。1885年10月12日付の『京報』に、次のような告示が載せられている。

醇親王を総理海軍事務に任命する。全ての沿海水師は、醇親王により指揮命令が統括される。慶郡王奕劻と大学士・直隸総督李鴻章に会同辦理〔協力して処理〕させ、正紅旗漢軍都統の善慶と兵部右侍郎の曾紀沢に幫同辦理〔補助的に処理〕させる。北洋で水師を精練する仕事は、専ら李鴻章に任せることにする。<sup>3)</sup>

ロバート・ハートは、この知らせに気持ちが高揚した。イギリスの影響力が、そうした中央官庁に浸透できるかも知れない。彼は、イギリス外務省に次のように打電した。

私は、1861年に海軍本部（Admiralty）を提議した。その結果、レイ・オズボーン艦隊ができたが、挫折したため進捗が阻まれた。1873年に再び提議し、その結果、砲艦から成る艦隊ができた。1883年に提議を再開し、七番目の親王〔醇親王奕譞〕を海防大臣にするよう提案し

た。そして今の諭令は、その親王を海軍総司令官に任命したのだ！ フランス人、ドイツ人、アメリカ人は、優勢を確保しようとしているが、私は海軍をイギリス人の手中に掌握し続けたのである。海軍本部は、大きく前進した。そして中国は、ラングを欲しがっている。申し分のない始まりである。もし逃したら、機会は二度と訪れない。彼を来させよ！ 中国は、<sup>4)</sup>本当に動き始めている。

後述するように、ラングは本当に中国に戻ってきた。しかし、彼の影響力は、広い範囲には及ばなかった。米国公使デンビーは、新設された海軍機関〔海軍衙門〕においてドイツの影響力が優位を占めることをなお懸念していた。過去に北京の近くで兵器製造工場を創設した経験を持ち、デンビーが「とてもリベラル」と呼んだ一人の男がいて、その男を長とする機関からの外国製機械に向けた需要が大きいと予測したからである。<sup>5)</sup>市場と影響力は、デンビーのような観察者にとって進歩の要素であった。

現代の中国人歴史学者李劍農は、李鴻章を海軍衙門の主要な創始者と見なしている。<sup>6)</sup>しかしながら、恭親王奕訢が宮廷から追放されていたため、李の影響力は、かつてほど強くはなかった。醇親王奕譞は、罷免された恭親王の異母弟であったが、当時は新顔であった。中央で編成された神機營（先述した「練軍」）と過去に関わりがあったことが、彼が選ばれた要因であった。また彼は、北京ではずっと「主戦」派のリーダーでもあった。李鴻章の比較的慎重な見解と釣り合いをとるため、海軍総理に任命されたのかもしれない。西太后は、恭親王と争う際に、長らく醇親王を利用した。奕訢と共に、奕劻も昇進した。奕劻は、総理衙門の新しい首席大臣となった。二人は、西太后の言いなりになった。醇親王は、光緒帝の父親でもあった。そして、1885年には、その若者はそろそろ成年に達する年頃になっていたが、君主の地位はしばらくの間お預けにさせられるかもしれない。なぜなら、総理が自分の息子に服従する必要が生じるのは、とんでもなく具合が悪かったからである。1886年に光緒帝が正に成人したとき、醇親王は皇太后に対し、息子を更にもっちりと教育するために、彼女の摂政期を3年間延長してもらえよう頼み込んだ。<sup>7)</sup>総理海軍事務という新しいポストに醇親王を任命するに至った動機は、彼が特別な権限を持ったとしても、ほとんど何も処理できないことを見透かした政治的な計算をおそらく含んでいたであろう。

醇親王は、彼の新しい仕事に大変熱心であった。海軍について詩を書いたほどである。<sup>8)</sup>しかし彼は、海軍衙門を海軍業務に関する真の中央理事会とはしなかった。海軍衙門は、次第に内務府或いは皇室の道具となったのである。その役人達は、名目上は海軍衙門に割り振られた年間400万両の予算を海軍とは全く関係のないところに使用した。<sup>9)</sup>李鴻章は海軍衙門の一員であり北洋大臣でもあったが、旧海防経費を二人の地方大臣〔の財源〕から新設の海軍衙門〔の財源〕へと転換するよう提議した。彼が長らく得ようとしてきた、海軍支出における卓越をこれでやっと実現できると多分期待していたであろう。しかし建設、いや一新されたのは、李の北洋艦隊というより、むしろ頤和園であった。<sup>10)</sup>頤和園において海洋に関わる唯一の展示館は、いわゆる石舫であった。そのように言われた理由は、湖底から屹立する、この二階立ての建造物が、ジャンクの船体に象られた大理石の基礎の上に建てられ、奇抜な外輪の上部覆いを付けて完成されており、その中には、娯楽の域に追いやる想像上の外輪があったからである。偏見を持った外国人にとって、

ここに「中国海軍」が存在した。いくら曾紀沢が生まれ変わった機関を切望しても、満洲人の上司に掣肘<sup>せいちゆう</sup>を加えられ、憤死させられたと言われている<sup>11)</sup>。

当初、海軍衙門は、海軍改革に前向きを装った。1885年9月、戸部の指令は、地方官僚が戸部と海軍衙門の承認を経ずに海軍物資を購入することを禁じた。1886年11月28日に福建船政大臣の裴陰森<sup>はいいんしん</sup>〔福建按察使と兼務〕は、ドイツから大砲を購入することについて恭しく許可を求めた<sup>12)</sup>。その新設機関は、艦隊の立ち入り検査も実施した。1886年の初めに曾国荃は、北洋艦隊との合同演習に参加するため、残りの南洋艦船を北方に派遣した。そして、そのしばらく後で、醇親王、李鴻章、善慶は、旅順口と威海衛で行われた合同演習を見た。彼らは、沿海の防備を視察している最中であつた<sup>13)</sup>。

ところが、こうした見せ掛けの海軍中央集権化は、長続きしなかった。1887年に当時両広総督〔広東・広西両省を統轄する地方長官〕の張之洞<sup>ちやうしどう</sup>が福州船政局に8隻の砲艦を注文した際、張はその行いを皇帝に報告したものの、〔戸部と海軍衙門の許認可が必要な〕新しい経路<sup>チャンネル</sup>を通しはしなかった。戸部はその行いを公然と非難したが、裴陰森は、張を支持した。なぜなら、こうした地方からの注文が無いと、造船所は閉鎖に追い込まれるからである。注文は、有効であつた<sup>14)</sup>。

海外から海軍物資を購入することは、次第に海軍発展の主要な方法となっていたのであるが、海軍衙門が制御できる範囲を遙かに超えていた。イギリスに派遣されていた出使大臣薛福成<sup>せつふくせい</sup>は、中国に秘密裏に兵器が持ち込まれることに苦情を申し立てた。そして、総理衙門は外国領事に対して、あらゆる中国向け兵器の船荷<sup>ふなに</sup>は、南北洋大臣、海軍衙門、各省督撫のいずれかの認可を得たものでなければ、非合法とすべき旨を通知すべきことを提議した。権限を与えられた官僚がこれほど多く互い違いに挙げられていることは、いくらよく見ても、購買がなお旧来の地方分権体制に沿って行われていたことを示している。

そのうえ、1892年に醇親王が死去し、海軍衙門はより経験不足の人物のもとに置かれた。内務府による併合が、ほとんど完成していた。海軍衙門の公式的な消滅は、日清戦争を待ってはじめて訪れたが、その戦争に向けた中国側の準備に何一つ貢献しなかった。全く活動しなかったわけではない。李鴻章が海軍衙門に宛てて書いた書簡は、鉄道、鉱山、通商における利害関係を示している。しかしながら、この種のことは、衙門に意図された役割からすると、いくらよく見ても枝葉末節であつた<sup>16)</sup>。

李鴻章にしてみれば、海軍衙門を利用できなかつたし、結果的にいつもの地域的な役割に押し込められたため、新しい資金の自称中央集権化は脅威になった。海軍衙門に共同管理された経費は、彼の北洋海防経費さえも吸引した。その結果、李鴻章は、ずっと彼自身の定期収入であつたものを支出するために許可を求めなければならなかつた。李がこの状況から脱却するには、北洋艦隊を訓練する際に、自分に首席の地位を与えることを示す勅諭を取り付ける必要があつた<sup>17)</sup>。ところが、李の購買は切り詰められ、新たに獲得したほんの僅かなものを除けば、北洋艦隊は廃れかかっていた。李は、旧来の地域的利益に沿って行動した。1885年の中頃に、裴陰森は、李鴻章が福州に残した1隻の船である「横海<sup>おうかい</sup>」号を先買権によって獲得しようとしていると苦情を申し立てた。李は宥める素振り<sup>なだ</sup>をしたが、1886年に、李が新設の海軍衙門〔の会辦〕に選ばれた後、裴は人員に関する問題で、再び不満を訴えた。裴は、一度は軽視していた呉仲翔<sup>ごちゆうしょう</sup>を福州に呼び戻したかった。呉は、そのとき李鴻章に仕えていたのである。左宗棠ですら、呉の復帰を望んだ。

しかし李は、彼を引き渡すことを拒んだ。呉は目下休暇を取って帰郷していたので、裴は再び申し入れた<sup>18)</sup>。他の者も、北洋大臣に憤慨していた。1891年に、劉坤一は、李は艦隊を建設するのに最善の機会を持っていたと不平を陳べた。すなわち、南洋大臣が度々交代したため、継続的な海軍計画は不可能であったのに、彼は20年以上も単独で直隷に在職していたのである。劉自身は、先行する15年の間に、南京の職〔两江総督〕を務めたことがある。それは、長い期間を距てた三期に分けられる<sup>19)</sup>。

李鴻章が、京師での地位すら含めて、一枚岩の恐るべき集団を擁していたこと、そして、李が率いる無傷の北洋艦隊と共に戦後の海軍再建を開始するという決定に賛成したことは、確かである。しかし李鴻章は、それでもなお本質的に地方官僚であった。海軍の統一を独力で進める課題に対し、清仏戦争以前の10年間に達成できた以上のことが、戦後の10年間に達成できたわけでは決してなかった<sup>20)</sup>。

しかしながら、李鴻章は、彼の北洋艦隊を再編成したのである。そして、1888年の北洋海軍章程を他の艦隊のモデルにしようと努めた時、李は自分の支配力を多少は拡大することを探究していたのである。1888年9月30日に、醇親王は皇帝に対し、李の25隻から成る艦隊のための新しい海軍章程を提出した。〔章程の大半で採用された〕イギリスや〔部分的に参考にされた〕ドイツの規約は承認されたが、全てが本国の経験に取って代わるわけではなかった。北洋艦隊の指揮権<sup>21)</sup>は、海軍提督の丁汝昌<sup>ていじょしやう</sup>に与えられ、左翼総兵の林泰曾<sup>りんたいそう</sup>と右翼総兵の劉步蟾<sup>りゅうほせん</sup>によって補佐された。彼らは提督に服従することを要求されたが、彼らの艦上では、訓練中の学生にすら全面的な権限を持っていた。陸上の官僚、市民、軍隊は、北洋海軍の諸艦船に対するあらゆる権限が否定された<sup>22)</sup>。艦隊は、機能的に七つの小艦隊に分割されていた。遠洋航海に適した戦艦が、それぞれ右翼と左翼に位置する戦艦の「定遠<sup>ていえん</sup>」と「鎮遠<sup>ちんえん</sup>」と共に、それぞれ3艦船から成る三つの「翼」〔中軍と左右翼〕に編入された。他の四つの翼（小艦隊）には、支援任務があった。港を守る〔蚊砲船〕（モニター艦）から成り、「後軍」と名付けられた艦隊とともに、魚雷艇、練船、運船から成る艦隊が創設されたのである。翼の司令官の等級は、指揮権の規模と性格によって決められた。こうした取り決めは、イギリスの影響を反映していたし、戦略上の洗練を示している<sup>23)</sup>。

ドイツの慣例は、北洋海軍の人員組織を左右した。英国式における3人の海軍支配人ではなく、むしろただ一人の提督が存在した。李鴻章は、これまで中国の単一組織において数名の提督が存在したことはない指摘した。林泰曾と劉步蟾は、旅順口の本営の一員として、ドイツ製軍艦を1隻ずつ指揮した。丁汝昌のスタッフは、人員・軍械・糧食を管理する総兵〔2名〕・副将〔5名〕・参将〔4名〕、及び艦隊兵器のための遊撃〔9名〕・都司〔27名〕・守備〔60名〕・千総〔65名〕・把総〔99名〕を含んでいた。詳細な章程は、これらの官員一人一人の活動を網羅していたし、時には〔43名から成る経制外委の枠内で〕<sup>24)</sup> 巡查を付けることもあった。

合同演習を準備する際には、李鴻章の貢献とともに、おそらく心中に秘められた目的が伺える。毎年冬、北洋艦隊は、南北合同で南の海岸沿いを巡航するために、南洋に向かうことになっていた。南洋にいる間、北洋の艦長は、丁汝昌提督と北洋大臣を経由して、海軍衙門に日誌を提出することになっていた。もし、そうした合同演習が「都合の悪い」場合、北洋大臣は、南洋海軍司令官（章程には南洋海軍提督を置かない旨を註記していた）にその旨を助言することになっていた。司令官は、南洋大臣にそう助言する立場にあるからである。

相互に、毎年春に、南洋の全巡洋艦が（章程にはそれら全艦の名前が記されている）、海軍衙門に指令されて北洋に往くことになっていた。北洋にいる間、南洋の艦船は、北洋大臣の指令の下に置かれた。北洋大臣は、視察を実施し、賞罰を与えることになった。北洋大臣は、俸給、消費石炭、南洋艦の出費について南京の南洋大臣と連絡を取り合ったが、それらを支払うのは南洋大臣であった。秋になると、南洋の艦船は帰還し、日誌が南京経由で海軍衙門に送られた。報酬が無いにせよ、章程の中では、遠く離れているからと<sup>25)</sup>いって、南洋大臣は自分の艦船を訓練するのを避けるべきではないことが力説されていた。

北洋で演習している間、全ての艦船は、奉天、直隸、山東、朝鮮、そして「ロシアと日本列島」を巡航する。旅程は、北洋大臣の認可が必要とされた。もし、戦艦が海軍衙門か北洋大臣によって条約国へ特派されるか、或いは通商保護使節を派遣する場合は、あらゆる詳細は、全ての人員の個人的な利益と不利益を記録する北洋大臣からの「咨文」（同格機関の間の通信を意味する語）の中で、海軍衙門に送り届けられることになっていた。外交使節団の為の条約原案は、注意深くとり纏められた。もし使節団が帝国の長官を含んでいたなら、北洋大臣は海軍衙門とその生みの親の総理衙門に報告し、国家利益のために使節団の費用を自前で負担することになっていた。<sup>26)</sup>

李鴻章は、北洋海軍章程の中で、近い将来に外交の新時代が到来することをはっきりと理解した。しかし、1888年の章程は、李鴻章が北洋大臣としての影響力を高めるために、海軍衙門における「国家」官僚としての優位性の利己的利用を図った可能性がある。当初の立場では、李鴻章は、中国のあらゆる場所から艦船を派遣でき、その間は、そうした外交使節のために支払いを行い、彼の地域的力量的範囲内で情報経路として奉仕をさせ、かくして直近の地位にまで高まったのである。単なる訓練の時ですら、彼は、北洋だけでなく南洋に属する者に対しても賞罰を与えることができた。疑うまでもなく、このことは彼に対する忠誠心を高めることを可能にしたであろう。1888年の章程の中で、南洋における北洋艦船に関する規定は、短く曖昧であり、北洋の全艦船は、どの場所に停泊していたとしても、丁汝昌提督に対し——本人が何処にいようと——責任を負うと明記していた。その諸規定は、充分に互惠的ではなかった。しかしながら、こうした互惠関係の欠如は、章程の一続きの部分で露骨には現れていない。すなわち、李鴻章に便宜を与えた詳細な諸規定は、本文全体の別々の部分に分散されていたのである。

李鴻章の章程は、採用された。章程は、彼の地位を紙の上で全面的に強めるものではなかった。1890年には、朝鮮国王に第三ランクの側室を授けるため、南洋艦船の「登瀛州」が朝鮮に派遣された。それは外交上の微妙な一片であった。翌年、南洋大臣は、南洋艦隊も李の章程の「真似をして」、李の北洋で行われた大演習に参加した。そして、広東艦隊ですらそこに派遣したのは3隻に止まったのに、李の4隻に対し、〔南洋艦隊から〕現れたのは6隻であった。視察団を形成したのは、李鴻章、山東巡撫の張曜、<sup>ちようよう</sup>広東海軍官〔広東水師統領副将〕の余雄飛、南洋の司令官〔南洋水師統領前寿春鎮総兵〕の郭宝昌<sup>かくほうしやう</sup>である。もちろん李鴻章は視察団の中で上官であり、報告書を書き、上々の出来映えであったと醇親王を称えた。1894年には、北洋において再度<sup>27)</sup>同じ形式で共同閱兵式が行われた。

これらの大演習は、真の統一を意味しなかった。依然として四つの艦隊が存在し、李鴻章の艦隊が最も大きかった。1894年に日本と交戦したのがこの中国最大の艦隊であったことは、多分幸

運であつたらう。しかし、この事實は、壮大な計画を証明するというより、むしろ偶然の一致である。危機の年に、誰一人として「挙国一致の（national）」艦隊を徴集できなかつたし、李鴻章ですらできなかつた。

その点について、北洋艦隊自体の内部ですら、組織の混乱が記録されている。日清戦争の時に李の戦艦内で軍務に就いていた英国人タイラー（W. F. Tyler）は、李鴻章の北洋海軍の創設に関して、「この組織の全ての中において、——それは艦隊だけでなく、総督から兵器製造工場の総辦〔総支配人〕に至るまで、その同類のもの全てを含んでいる——有力者からなる複数の集団は、全体の目的を達成するためではなく、ただ彼ら自身のために動いていた。様々な集団が、必要な時に雇われたり雇われなかつたりしたが、それは不都合な事態が引き起こされるのを最小限に押さえるギブ・アンド・テイクの方法によるものであつた。効率という見地からすれば、それは秩序ある体制とは正反対のものである。ところが、それは、奇妙な秩序が存する無秩序であり、——平時においては——ひと騒ぎも起こらずに作用する。そして、公金横領と縁故主義も横行するのである」と陳べている。明らかに1888年の章程は、北洋艦隊における全てを規定していたわけではなかつた。李鴻章の為人について、タイラーは、次のように記している。「彼の組織体に横行する汚職、公金横領、縁故主義は、李自身の中に根源があつた。そして、ある範囲では中国官僚の中ですら例を見ないものであつた。彼自身が組織化された非効率な国家装置の中に巻き込まれていた。彼にとつても、それが通常の状態であつた。けれども、彼が熱烈な愛国主義者であつたことに疑問の余地はない。そして、そこに中国の抱える難問の一例が存在する。<sup>28)</sup>」

清仏戦争から日清戦争に至るまでの、この10年間において、物質的な発展は見込めなかつた。李鴻章は、彼の購買物を切り詰めなければならなかつた。それに、〔馬江の役で攻撃されたために〕深刻な状態に陥つた一海軍建設設備たる福州船政局は、緊縮状態から救い出される目処が立っていなかつた。

左宗棠の遺言となつた意見書は、多くの海軍問題について触れていた。その中には、まだ専門化されていない福州船政局の生産ラインの技術標準化の欠如が含まれていた。左宗棠は、年間300～400万両が船政局に費やされるよう要求した。彼は、船政局の拡張を切望していたのである。左は、間もなく死去した。特にハートは、この死をとりわけ悲しんだ。左宗棠の死去により、先頃の清仏戦争敗北により鼓舞されてきた海軍改革運動の活力が奪われることを懼れたからである。<sup>29)</sup>

左宗棠が生きていれば何かが成し遂げられたかもしれないが、戦後の福建船政大臣の裴陰森は財政難に出くわした。建設資金は、依然として維持費に転換されていた。戦争が終わって、張佩綸は破壊された9隻の艦船の維持費分は継続するが、新規の建造に充てるよう提議した。福建善後総局は、その計画を却下した。いずれにしても、裴陰森は、建設資金の延滞に苦情を陳べた。長きに亘る話し合いを経て、船政局は福建〔閩海関〕の四成洋税から毎月2万両、六成洋税から毎月3万両を得ることが認められた。1886年7月に、裴は、1884年第一期の資金から支払われるべき総額の一部しか受け取っていないと報告した。〔資金供給源として〕よく争われた六成洋税において、不足額はほぼ250万両、すなわち約7年分に相当する額にまで達した。<sup>30)</sup>

福州船政局は、物質的には前進していた。ハートは、乾ドックと大砲製造工場（大砲の製造には使用されなかつたが）について書いた。ハートによれば、1891年に至つても、ドックでの作業は、

ただ「弱々しく」続いていた。船政局は、依然として経済的に孤立していた。ハートは、「〔中国人は〕本国人の間で協力して事業を進めることがなく、統治階層からの奨励もないので、現存する全ての地方産業において、特筆すべき発展は見出されない」と批評している<sup>31)</sup>。

裴陰森の見解では、1885年における船政局の傑出した工場施設は、エンジン工場と鑄鉄工場であった。1886年末には水雷工場施設が生産を進行していた。もちろん裴自身は、ずっと造船に関わっていた。裴は、フランスは「2隻か3隻」の鉄甲艦を持っていたから戦争に勝利したと陳べた。中国は鉄甲艦を製造すべきである。戻ってきた建設技師の魏翰、陳兆韜、鄭清濂は、その仕事を実行する能力があった。そして、左宗棠、穆因善、閩浙総督〔福建・浙江両省を統轄する地方長官〕の楊昌濬は、〔鉄甲艦の建造に向けて〕努力すべきことを同意していた<sup>32)</sup>。

その間、鉄骨木皮船の「横海」が完成しつつあり、もう1隻が建造中であった。裴は、これ以上旧式の混成船を造りたくなかった。そうした船は、武装した商船に過ぎなかったからである。彼の新式鉄甲艦は、完全無欠な軍艦でなければならなかった。動力は1,600馬力に増強され、船体は若干大きくなった。前述した鉄骨木皮船には、イギリス製動力装置が備え付けられていたから、現存している工場施設が実際にどれほど裴の野心を満たしていたかは疑わしい<sup>33)</sup>。確かに、鉄甲艦は進歩の印であった。ところが、当時の欧州では、1万5,000トンに及ぶ鋼鉄製軍艦に流れが変わりつつあった。裴は、魚雷艇の建造も望んでおり、1886年9月には、〔前署船政大臣〕張佩綸により発注された魚雷艇がドイツから届いた。裴は、それを〔模造するための〕基本型として使う計画を立てた<sup>34)</sup>。

裴が外国製軍艦を購入するのに反対したのは、もっともなことである。魏翰は、李鴻章の採り入れた最新の英独艦船を視察したことがあり、福州船政局ならより安価にそれらの複製品を製造できると主張した。それで、裴は1886年末に、指示された型式の軍艦を建造するための資金を要求した。その軍艦は、北洋艦隊に派遣されるのである。しばらくして、裴は、福州船政局で初の装甲艦を起工した旨を報告した。その建造には外国人が一人も含まれないことになっていた<sup>35)</sup>。

しかしながら、国産の艦船に有利な国策を創出しようとする裴の試みは、水泡に帰した。1887年3月2日に、李鴻章は、魏翰が欧州で視察した艦船の引き渡しに向けた計画について報告し、必要とされた官吏が中国に帰国するための旅費として総額22万両を請求した（そして得た）。その総額は、福州船政局の戦前における平均収入の半分に近かった<sup>36)</sup>。そうした注文が新設された海軍衙門の経路を通じてなされたか否かに関わりなく、裴陰森は、先述したような、地方第一主義に立脚した艦船の発注に向けて戦ったのであろうか。

裴陰森は造船を継続したが、進み具合は遅かった。1887年に20万両の鉄骨木皮船「広甲」が広東の総督〔張之洞〕に向けて進水した。この222フィートの船に蒸気機関を備え付けたのは、英国企業であった。その年（1887）の「贛泰」は、中国初の国産鉄甲艦であった。この2,400馬力の軍艦は、南洋大臣のために建造された<sup>37)</sup>。たとえ船政局が建造費のたった半分しか支払う必要がなかったとはいえ、裴は、1889年の9月を通じて、北京の助力を求めて少なくとも六度の嘆願を書いた。彼に降り掛かった苦勞の為に、この「60歳の老学者」は意気消沈した。1889年に、ある英国人は、「なんとまあ、大臣がまさに自殺しようとしていた。彼は、修理中の蒸気機関を点検するふりをしながら、船架からこっそりと跳び降りた。しかし彼らは、命を落とす前に大臣を助けた。」と、友人に報告している<sup>38)</sup>。1890年〔4月20日〕に、裴は退職した。しかし、財政問題は

継続し、裴から福建船政大臣を引き継いだ卞宝第〔閩浙総督と兼任〕は、1891年に二度この問題について書いて<sup>39)</sup>いる。

特徴的なことに、福州船政局は、清仏戦争から日清戦争までの10年間に赤字を出していない。その一年当たりの平均支出は、約50万両か、或いは1883年から1893年までの年間平均収入より約20%少ない程度であった。この10年間に、船政局は498万6,888両を費やした。その額は、1885年に左宗棠が毎年船政局が手に入れられるよう努めたが実現しなかったものに大体相当し、李鴻章が艦船購入のため一年間に持ちたいと望んだものに大体相当した<sup>40)</sup>。

予定の方向とは正反対に進んだため、李鴻章は、はっきりとした指針を持たなかった。李は、新設の海軍衙門に失望していた。海軍衙門に対し、李は定期収入の要求を繰り返したが、その甲斐がなかったからである。1882年から1891年に至るまで、李は毎年平均して120万両を得ていた。しかし、この額では充分でなかった。李の差引残高は減ってゆき、購買は削減された。ラングは、更に多くの艦船を購入するよう促したが、李はほとんど実行できなかった。そのうえ、李の歳入は適度に安定していたとはいえ、その総額においては、艦船購入に寄与する、しっかりした再調整が存在していた。李が各省海関から集めた資金は、ただ北洋の沿海諸省のみから集めるよりも遙かに多額になった。1883年に、李が彼の「貧しい省」——すなわち、定着した慣行により他の「裕福な」省から補助金を受け取っていた一省（直隸）——のために受け取ったものは、全ての沿海地方からもたらされた。ところが、1888年になると、上海の海関〔江海関〕が南方からの最大提供者であった。これは中国財政制度における競合風土病（rivalry endemic）の反映であった。張之洞が福州に小型船を注文した際、それらの支払いをしなければならなかった。そして、張は自分の資金を保護し、彼自身の海域で厳密に使う予定をしていた艦船のために、その資金を蓄えていたのである。

ある意味で、李鴻章が彼自身の最も狡猾な競争相手であった。彼の陸軍である淮軍は、この期間中に二度か三度、彼の近代海軍の収入を享受した。この特権的な陸軍ですら、1873年の約420万両から1892年の約280万両まで収入が落ち込んだ<sup>41)</sup>。

李鴻章は、自分にできることを実行した。1884年10月、すなわち清仏戦争の終わる前に、李は、随分以前に注文していたドイツ製姉妹艦の「定遠」と「鎮遠」を受け取る準備をしていた<sup>42)</sup>。1885年に、李は、更に4隻の船を発注したが、2隻はイギリスに、2隻はドイツに注文した。曾紀沢と許景澄は、型式について訝った。すなわち、速度を速くするために鉄甲の取り付けを止めた製造業者もいたし、とりわけ鉄甲艦の中には、中央の砲郭にだけ鉄甲が付けられている艦船や、喫水帯にだけ〔鉄甲が〕付けられている艦船があった。宮廷は、李鴻章に質問した。李は、中国は色々な型式を試してみるべきと答えた。後に李は、鉄甲の無い喫水の浅い船で、水雷が装着された17か18ノットの能力をもつ艦船が、アジア海域の戦闘や巡視に最も適していると曾に建議した。建議が出されると、1885年11月に2隻の艦船がイギリスとドイツの両国に発注された。これらの艦船は、（魏翰が福州船政局ではより安い費用で建造できると信じていた）国産姉妹艦と一対になっていなかった。イギリス製艦船の「致遠」と「経遠」は、それぞれ〔排出量〕2,300トンと2,850トンであり、そしてそれぞれ鉄甲無しと鉄甲付きであり、装備と速度も異なっていた。2隻のドイツ製艦船の「靖遠」と「来遠」も、鉄甲無しと鉄甲付きであり、同じ様な排出量と特徴を有していた。ラング艦長は、1887年に4隻の艦船を受け取りにゆく任務を指揮している<sup>43)</sup>。

これらの艦船が引き渡される前に、李鴻章は、動きが停まっていた他の艦船の購入について話を進めていた。1886年1月に、李は、海洋での任務に適合する艦船を5隻しか持っていないと海軍衙門に不満を陳べた。李は航行中の4隻について言及し、喫水の浅い鉄甲快速船3隻と5隻か6隻の魚雷艇を追加購入したいと陳べた。李は、大型造船所を建設する必要性も力説した。李は、(中国には多様な型式の艦船が必要であるとまだ主張していた) ハートも素人並と批評した。<sup>44)</sup>

しかし李鴻章は、海軍物資の購入をほぼ終了していた。1887年に李は、宮廷が北京で「水師学堂」(後述)を開設するために資金を借りるのを手助けした後で、6隻の魚雷艇を発注した。李は旅順の海軍施設のために浚渫船も購入した。<sup>45)</sup>しかしその後、李はもはや海軍艦船のために注文を出すことはなかった。

もちろん、李鴻章の競争相手には宮廷自体が含まれていた。中央政府が自ら対抗する形で海軍力を得ようとはしなかった。宮廷の目標は、貪欲な西太后の欲求を満足させることであった。西太后は、——もし刺激が欲しければ——宦官の李蓮英<sup>かんがん りれんえい</sup>によって満たされた。南洋大臣も同じ様に圧力を感じていた。それで、この章では、頤和園の改修問題に戻ることにする。

包遵彭<sup>ほうじゅんほう</sup>は、中国海軍に関する最新の研究の中で、南北洋大臣からの資金〔南北洋海防経費〕が海軍衙門に編入されて以後、「内部使用」による経費の不正使用が存在したと陳べている。南洋大臣の曾国荃は、彼の海防経費が海軍衙門に編入される以前は、1年間に約40万両の防衛費収入を持っていた。——それですら、彼が〔南洋海防経費として〕支出することを認められた200万両のうち、たった約5分の1に過ぎなかった。曾の見たところ、李鴻章の海軍はずっと偏愛されていた。しかし、李ですら資金が不十分だとすれば、南京はどうか？ 沿海防衛費は「内部使用」に費やされた。曾は、それが欲しいと「叫んだ」のに、「その最小のしずく」を得られなかった。新設の海軍衙門は、物事をより悪化させたのである。<sup>46)</sup>

それだけでなく、海軍衙門は、各省督撫から追加の特別分担金を要求した。李鴻章が旅順船塢工事の支払いに使うために、直隸で特別課税が必要であると力説していたにもかかわらず、海軍衙門は、香港上海〔滙豊〕<sup>わいほう</sup>銀行における李の海軍基金から30万両を引き出すように命じた。その30万両は、「三海」(北京にある湖)工程に支出されることになっていた。李は、彼が4隻の艦船を発注しており、旅順に資金を投入するために膠州湾<sup>こうしゅう</sup>の軍港工事を既に遅らせており、彼の幾つかの現有艦船を就役解除することをずっと求められてきたとして反撥した。にもかかわらず、李はまもなく、醇親王を通じ、計画された「仕事」のために80万両を借りよう命じられた。それは、事実上西太后の保養所となることになっていた。彼が外国銀行家に〔借金を〕申し入れる際に感じるであろう、きまりの悪さを全て覆い隠すために、策略が考え出された。例えば、そのお金は、「水師学堂」のために使われることになっていた。1886年12月に、李は、彼の事業と烈しく競争している外国人銀行家と話をしている。ここに京師に在る「昆明湖水師学堂」の起源がある。——それはともかく、後日談として、行楽地となったその湖では、正真正銘の汽艇が、宮廷女子で満員となった遊覧船を牽引していたそうである。<sup>47)</sup>

1888年に(自分の艦隊を再編成していた)李鴻章は、9隻の近代的艦船を保守するために176万8,100両を支出していると報告した。必要な艦船を追加するために、彼は更に300万両を望んだ。<sup>48)</sup>しかし、李が要求しても無駄だった。その年、紫禁城<sup>しきんじょう</sup>の近くにある西苑、或いは西湖は、西太后の一時保養地として修繕された。一方、昆明湖の万寿山にある乾隆帝<sup>けんりゅう</sup>の旧邸が、西太后に相

応しくキラキラにされた。西太后は、もうすぐ「退職する」ところであった。ある報告に拠ると、「彼女がその事業を始める準備ができた頃、海軍衙門が近代海軍を建設するために1,000万両を要求した。その事業は、西太后にとって無駄と思われたので、彼女の全面的な影響下にある官僚達は、請願書の中で、近づいてきた西太后の誕生日をお祝いするために庭園を一つ差し上げる必要があると主張した。<sup>49)</sup>彼女の引退は、1889年にやって来た。彼女が60歳になる誕生日は、〔5年後の〕1894年になるまでやって来ない。その庭園の計画は、仰々しいものであった。御史の林紹年<sup>ねん</sup>に拠ると、彼女が計画を実現するに当たって使用するために、北洋大臣の預かり<sup>デポジット</sup>として、地方督撫は特別海防経費を創設する手筈を整えた。その特別基金は、1889年に実現した。<sup>50)</sup>

より正確に言えば、李鴻章が「海軍経費」の主導者のように見えるのは、醇親王によって手筈が整えられていたのである。李は、基金について曾国荃に書簡を書き、それは本当に西太后の楽しみのために使われるべきであると陳べている。曾は1889年に、少しばかり気持ちを高ぶらせて書いた書簡の中で、その情報を江西巡撫<sup>こうせい</sup>〔徳馨<sup>とくけい</sup>〕に伝えている。曾は、こうした特別基金が毎年強要されることを懼れた。<sup>51)</sup>

中国高官達が内密に準備をしていたとき、御史の林紹年が声を上げた。林は本当に、不正の発覚は人民革命を引き起こすと陳べた。西太后への贈り物は、戸部から正々堂々と届けるべきであった。あらゆる口実を設けて婉曲的に集められた基金の全ては、返却されるべきであった。公的記録に拠ると、そうした非正規基金の返却を命じる指令が出された。しかし、完全に返却されたかどうかは疑わしい。曾国荃は、「海軍費」のためにこの地域で集めた資金を列挙した。江西は10万両を供給し、江蘇、江寧、両淮は70万両を提供した。最初の銀両は、全額が返却された。しかし、より高額になった二度目は、返却されなかった。そして彼は、そのお金の用途の調査を望んだ。なぜなら、これらの総額は、しばしば地方防衛費からもたらされたために、うんざりするほど引き上げられていたからである。曾は、輪船招商局<sup>りんせんしょうしょうきょく</sup>ですら10万両を提供していたことに気が付いた。このことは、彼に興味を起こさせた。なぜなら、輪船招商局は、江蘇に同じくらしい借金を抱えており、こうしたより政治的な用途にどうやら流用していたらしいからである。<sup>52)</sup>

かてて加えて、両広総督は100万両を拠出し、直隸と四川は、それぞれ20万両を拠出した。総計して、少なくとも220万両が、この1889年の「海防経費」に入れられた。1887年に、同様の取り立てが存在していた。それは、海軍衙門の想定上の経常収入、すなわち勿論<sup>もちろん</sup>完全には実現されない400万両の海防経費よりも、名目上は上回っていた。しかし、北洋艦隊費を認めた後、海軍衙門は、1889年から1894年に至るまでの6年間に、特別な取り立てを除いて、おそらく約850万両を処理していたであろう。<sup>53)</sup>しかし、海軍を建設してはいなかった。海軍衙門による実質的な活動は、日清戦争前夜における請願によって提議されていたが、その中で海軍衙門は、完成した頤和園の継続的な費用は、釐金<sup>りきん</sup>収入から、すなわち海軍衙門以外の資金源から充てられることが求められているのである。<sup>54)</sup>

海軍計画に比べて、頤和園の費用を評定するのは難しい。なぜなら、達成されていない海軍衙門の「経常」収入を取り扱わねばならないだけでなく、もし——李鴻章によってなされたように——日本との来るべき危機が適切に予期されていたなら、「短期集中的な」海軍計画に使われたであろう特別徴収や宮廷費も、取り扱わねばならないからである。李蓮英によって海軍資金の90%が頤和園建設に移され、李鴻章すらそのことに敢えて言及しなかったと言われている。<sup>55)</sup>一つの

適切な見積もりは、——明らかに海軍衙門の「経常」収入から——「無理矢理出させた」のは、毎年40万両にのぼったことである<sup>56)</sup>。もう一つの見積もりに拠ると、海軍資金の（およそ）300万両が諸艦隊からもたらされた。つまり1889年から1894年に至るまでの6年間に、毎年約50万両を移したことになる。たとえこれが海軍衙門の経常収入の90%に当たるとしても、それだけの額があれば、福州船政局を1年間操業させるか、或いは全南洋艦隊の賃金と食糧の支払いに充てられることが想起されるべきである<sup>58)</sup>。

別の報告では、頤和園の費用全体に関し、庭園や無用な石舫を含めて論じている。ある研究は、総額を1億両と見積もり、このうち7,000万両が外国借款からもたらされたという「地方のしきたり」を引用している。もしそうなら、3,000万両が国内で見出されなければならなかったはずである<sup>59)</sup>。約2,000万両と称される、現実的意味のない宮廷の貯蓄からもたらされたこの莫大な金額は、多分そのほとんどは役所を売却して集められた。他方、日清戦争の直前に、アメリカの当局は、1894年までに西太后が、彼女の誕生日を祝うために集めた6,000万両を朝鮮問題を解決するために流用することを渋々決定したことを報告した<sup>60)</sup>。

頤和園の全費用がどれほど複雑であっても、海軍は、艦船を購入・建造するために使われるべき膨大な資金を失ったのである。包遵彭は、羅爾綱<sup>らじこう</sup>の慎重な学説を引用し、海軍費のうち少なくとも1,000万両が誤用されたと陳べている。包自身は、「経常」及び「特別」資金の何れをも含めて、その数字を疑う傾向がある<sup>61)</sup>。多分、問題は決して明確には解決されないだろう。少なくとも、次のように言えるかも知れない。中国が違うように組織され、正しく指導されていたなら、1894年に海軍は日本に対してもっと有効に抵抗し続けたであろうと。中国は、貧しい国ではなかったのである。

李鴻章と海軍衙門が資金の競争者であったこと——そして、李の購買計画が停止させられたことも、明らかである。1891年に戸部は、南北洋による〔外国製銃砲・艦船・機器の〕全購買は、削減した分の銀両を戸部に解して留保し他の用途に充てるため、2年間暫時停止するよう求め、こうすることで李の購買計画を正式に終わらせた。丁汝昌らは強く反対したが、聞き入れられなかった<sup>62)</sup>。1891年12月末に、李鴻章は資金を要求し、彼が海軍衙門から公的に資金を依存していることを引き合いに出した。今や海軍衙門は、各地方が李の防衛経費を〔拠出する義務を〕履行しなかったため、李よりも活力があった<sup>63)</sup>。頼んだところで無駄であった。

老朽化した艦隊の収入不足を補うため、李鴻章は、真つ当とはいえない手段を採った。1891年に、外国人は、「中国砲艦と石炭船の船員たちは、芝罘と旅順・威海衛の軍港の間で旅客輸送業を営んでおり、利用者が増えている」と陳べている。翌年には、更に驚くべき外国人による批評が提起され、「数多くの軍艦が芝罘と旅順港の間を往来している。軍艦は間違いなく乗客を運搬する通常業務を行っており、現地人の乗客が移動する中国においては、大部分の商品は手荷物として運搬される」という。外国人観察者は、こうした行為に充分には慣れていなかった。もう一つの1893年の手記では、「軍船を乗客汽船として使用することは、欧州人には極めて異常であるとの印象を与える。この目的に使用された軍船は、主に北洋艦隊に属する小型砲艦である。これらの船は、絶えず往来している。軍人乗客用の切符は、電報局で購入できることになっている」と書いてある<sup>64)</sup>。日清戦争後のことだが、外国人観察者は、黄海の戦では幾つかの艦船のボイラーが使い古されていると陳べている<sup>65)</sup>。保守に無頓着なことと併せて、輸送業で酷使したことが、こ

うした劣化の原因であろう。

日清戦争の約3箇月前に李鴻章は、彼の最大の軍艦のため新たに21門の雑多なクルップ製速射砲<sup>そくしゃ</sup>を購入することを望んだ。海軍衙門と戸部は、61万両の要求を拒否した。それで、李は彼の維持費から20万両を持ち出すことで、12門の新品を購入した<sup>66)</sup>。

日清戦争の間、せっかちな宮廷は中国の敗北の全責任を丁汝昌提督に負わせたのであるが、李鴻章は、彼の提督<sup>かば</sup>を庇うために注意深く責任の所在を宮廷に戻した。

各国の刊行する海軍出版物を詳しく調査すると、日本の新旧快速船で利用できるのは21隻であり、そのうち9隻が光緒15年〔原註：1889〕以後に購入建造された艦船である。……最も高速な快速船は、23ノットである〔原註：これは「吉野」である〕。次に速いのは、20ノット程度である。……我々の艦船が初めて建造された時、西洋の船舶技術は、それほど発達していなかった。……近年、〔原註：戸〕部は、艦船及び武器の購買を停止する決定を行った。1888年以来、わが軍は艦隊に1隻の艦船も加えていない<sup>67)</sup>。

イギリスは戦争直前に李鴻章に対し2隻の快速船を購入するよう促していた。李がこのことを付言していたなら、李鴻章は〔戸部の責任を問うために〕もっと鋭利な刃物を前方に突き出したかも知れない。しかし李は、戸部の拒絶に出くわした。当時日本は2隻の艦船を購入し、そのうちの1隻を「吉野」と命名した<sup>68)</sup>。

李鴻章の技量が資金を獲得するための戦いに全く役立たないのであれば、他の購買者は、更にいっそうひどく制限された。南洋艦隊のために唯一直近に購入したのは魚雷艇であったが、その全てが満足できる代物であったわけではない。戦時中、南京では、旧式のドイツ製「南瑞」と「南琛」、そしてそれよりまだ旧式の「ガンマ」砲艦4隻を配置したに過ぎなかった<sup>69)</sup>。我々は、これを艦隊と呼ぶことは出来ない。

建造は、完全に中断したわけではなかった。1889年に、福州船政局は、2,850トンの鋼鉄製の「平遠」<sup>へいえん</sup>を進水させた。それは8インチの装甲帯が付けられていた。費用は、52万4,000両であった。しかし途中で、船は縮小され（再び財政難のため）、その外形は台無しになり、その結果たった10ノットほどになった。同じ年、福州船政局は、より小型の鉄骨木皮船「広庚」<sup>こうこう</sup>を進水させた。この船は、南洋艦隊に配属された。やや大型で、1,000トン級の鋼鉄艦「広乙」<sup>こうおつ</sup>（1890）は、非装甲の姉妹艦「広丙」<sup>こうへい</sup>（1891）と同じく、広東に配属された。1893年には、約2,000トンの「福靖」<sup>ふくせい</sup>が福建艦隊のために進水した。ついに、1894年福州船政局は、全鋼鉄製の練船「通濟」<sup>つうさい</sup>を完成させた。全鋼鉄製の艦船を建造したことは進歩であったが、もし国家的な軍事努力の調整がもっと良好に機能していたなら、より大きな進歩が得られたであろう。他の大規模な造船施設では、何も造られなかった<sup>70)</sup>。

この最後の戦間期の間に、兵器製造工場と造船所において著しい技術上の前進があった。例えば、広東における小規模な造船所と兵器製造工場の建設、廈門におけるドック、南京における改良、そして漢口では張之洞による大規模な工業事業がある<sup>71)</sup>。

江南製造局は、外国人の尊敬を受け続けた。1889年に、ある西洋人は、江南製造局が「広大な軍需工場」であり、造船所が付設されており、「大型の近代的鉄甲艦を建造できる高価で重量の

ある機械を備え」、400フィートのドックを持つことを見出した。<sup>72)</sup>のみならず、戦間期の10年間に、たった1隻ではあるが重要な艦船が建造された。1,500トンの鉄甲艦「保民」である。この1885年製の16ノットの軍艦は、南洋艦隊に移された。上海の外国人がこの船を「西洋諸国にとっての脅威」であると称賛したことは、示唆に富んでいる。2隻の小型砲艦も建造されたが、当時の西洋の図体<sup>ずうたい</sup>のでかい弩級戦艦時代に、それらは言及すべき取り柄はほとんどなかった。<sup>73)</sup>不幸なことに、江南製造局のドックは、上海を流れる河にある他の五つのドックと同様に、沖積土の上にあり、巡洋艦や非鉄甲艦に「十分な」支援を提供できたものの、重量艦にはできなかった。それをドックに入れるのに「かなりの」危険が伴うからである。<sup>74)</sup>この期間中に江南製造局が傑出していた所以は、造船ではなく、艦船の修理ですらなかった。

1889年に江南製造局は、レミントン銃を——日産数ダース——製造していた。ほとんどの作業は、手工で行われた。高価な機械は、使われずに放置されていたのである。外国人は、必要とされなかった。1891年に江海関税務司のブレドン（Bredon）は、20年ぶりに当地を訪れた。彼——明らかに専門家でない——は、「現地の親方が重そうな機械を操縦する施設〔がある〕。大砲工場、ライフル銃工場、銃砲弾製造所は、私が中国にあると思うあらゆる全ての中で驚くほど進歩しているという印象を受けた。……地方長官は、誇りに思っている」と称賛するだけであった。<sup>75)</sup>1893年に、カノン砲製造施設は、12インチの後装砲<sup>こうそう</sup>を製造していたが、現地生産品の全ては、「筒（tubes）」（どうやらバレル・ライナーらしい）のために取っておいたのである。<sup>76)</sup>

日清戦争後、旅行中のイギリス人ロード・ベレスフォード（Lord Beresford）は、（1898年）江南製造局に強い印象を受けた。しかし、〔後退装置を作動させる〕「油気圧」が消失している9.2インチ砲及び速射砲<sup>そくしやほう</sup>の中央に、「信じられないことであるが、使えない大型マスケット砲」のための鋼鉄製砲身があることに気がついた。<sup>77)</sup>

そうした証拠は、江南製造局が、中国の敗戦に対する反応として、清仏戦争直後に急遽「美しく且つ精巧な機械」で満たされたこと、しかし、工場施設は過剰な建設であったことを示唆している。たぶん能力を下回る働きしかなかったであろう。1894年に、台湾巡撫〔邵友濂<sup>しょうゆうれん</sup>〕は、彼の所に持ち込まれた江南製造局の生産物の供給は、平時の演習にしか使えなかったと陳べている。他方、ベレスフォードは、弾薬工場が毎年「100万〔顆〕」を生産できると書いている。一人の外国人による批評は、重要である。すなわち、「江南製造局は、より高い地位に昇進するための一種の通過的地位であるようだ。というのも、その総辦のうち3人は、諸外国に公使として派遣されたことがあり、地位の低い者は、国内外の公務で多くの要職に選ばれているからである。」<sup>78)</sup>江南製造局の経歴は、まだ明らかにそれに相応しく受け入れられていなかった。

北方では、李鴻章が彼の天津機器局を拡張していた。李は大沽に造船所〔大沽船塢〕を増設した。その造船所は、「広大な製造工場（engineering establishment）」と340フィートのドックを有していた。1888年には鋼鉄製のスクリューで動く牽引船である「遇順」号<sup>ぐうじゅん</sup>がその地で進水し、後には2隻の小型鉄甲汽船が進水した。大沽船塢は主に、浚渫船や牽引船といった保守修理用の船を建造するのに貢献した。<sup>79)</sup>

李鴻章は、彼の主要海軍基地を旅順港に建設した。李は、久しく造船所を欲しがっていた。1885年に李は海軍衙門に対し、彼の鋼鉄製の艦船が、一年に二度ドック入りしなければならぬと報告していたのである。李の大沽船塢は、彼の小型船を乗り入れることはできたが、14フィー

トの喫水を有する「超勇」や「揚威」は、上海にある外国のドックに行かねばならなかった。そして喫水が深さ20フィートの軍艦は、香港か横浜のドックだけが乗り入れ可能であった。<sup>80)</sup>

李鴻章は、旅順港建設事業を1881年に開始した。彼を補佐したドイツ人海軍技師のコンスタンチン・フォン・ハンネケン（Constantin von Hanneken）は、旅順港の手筈と要塞化に関する全面的な指揮権を与えられていた。旅順港は、当初「風のために運航不能になった」帆船の〔停泊〕港の域を出なかった。フォン・ハンネケンは、最初は要塞工事の担当であった。浚渫の契約は、フランス人技師に与えられていたのである。浚渫が完了した1894年には、入り口はまだ25フィートの深さを有しており、この深さは内河において首尾は上々であった。大規模な海岸施設が建設され、総費用は139万3,500両に上った。この費用は、直隸の海防経費や李が最後に艦船を購入して残った剰余金を含め、様々な財源からもたらされた。明らかに、李は彼の全てを頤和園の「海軍資金」に提供したわけではなかったのである。

陸上の工場施設は、造船所、機械工場、倉庫、鉄道、電気照明装置、防波堤を含んでいた。400フィートの石船塢は、蒸気力で水を汲みだした。船の停泊所もあった。それは二つの石の突堤とついでから成っていて、その一つは400フィートの長さであり、三面に船を乗り付けることが出来た。11月から3月までは、余りに寒いので船にペンキを塗ることができなかったが、李鴻章は、修理が上甲板の上で続けられている間、下側を修理できることを誇りに感じていた。小さな水雷艇用ドックや鉄を供給する「T字型埠頭」もあった。水雷は、外国人が「小型だが効率がよい」と評価した水雷貯蔵庫で試験され、管理された。

作業場——ボイラー工場、機械工場、ポンプ工場、石工工場、製鉄工場、鍛冶工場を含む——には、「最も近代的なエンジン」が入っていた。李鴻章は、これまで中国にはこうした近代的修理場はなかったとして称賛された。実際、日清戦争の間、7隻の艦船が修理のために旅順港に入った。そのなかには、損傷の深刻なものも<sup>81)</sup>あった。

李鴻章の施設は、恐るべき外観を有していたが、その補給体制は、望まれるべき多くのものを残していた。1888年の北洋海軍章程の中で、李は補給を取り扱う「後路」〔後方支援〕と題される部分を含めている。章程は、西洋において補給の役割は専門家に与えられているのに対し、実際に中国では、他の職務に就いている者が兼任することになっているとする。しかしながら、章程では続けて、補給は極めて重大な役であるから、そうした資格を有する者が就かねばならない<sup>82)</sup>としている。

李鴻章の補給体制は、旅順応添船械局、道台の管理下に置かれた天津海防経費、旅順軍械局、天津軍械局、威海行營機器廠、天津機器製造局、天津海防支応局を含んでいた。天津海防支応局は、材料を備蓄する義務も負っていた。これらの官衙の全ては、北洋大臣に従属しており、北洋経費により支援されていた。補給機関に関する年間報告は、北洋大臣によって海軍衙門に送られた。戸部にも同様に、詳細が送られた。

李鴻章は、国内の補給に全面的に依存してはいなかった。李は、外国製兵器の購買を継続した。李は、西洋軍需品の発展に気が付いていた。たとえば、前装式が棄てられていることである。李は中国艦船に単一型の大砲を採用する必要があると力説したが、彼自身はクルップの製品を好んだ。<sup>83)</sup>しかし、李のドイツ轟頁のために、銃と弾薬の補給を一律にできなかった。クルップの代理人は、自分の甥の一人を代理人として使用し、李に旧式の装備を売りつけた。李のもう一人の代

理人盛宣懷<sup>84)</sup>は、デトリングとハンネケンに近いマンドル (Mandl) を通じて注文を出した。ドイツ駐在の中国外交官許景澄<sup>85)</sup>も、発注した。1894年に、2,000トンの米国汽船「コロンビア」が、「長く、低く、鋭く」、李の天津に居る代理人に、あらゆる種類の大量の米国製兵器を食料に擬装して密かに持ち込んだ。そして密輸業者が熱狂的に努力したにもかかわらず（業者は日本人に妨害され、搭乗していた役人を船外に投げ出し、急いで逃げ出した）、この積み荷は、李の兵器に対する困難を軽減させられなかった。李の軍艦は〔英独〕両国からもたらされたが、疑いなく兵站業務担当者に問題を提起したのである。<sup>86)</sup>

李鴻章自身の補給機構には問題があった。1894年8月に、輸送船「高陞号」<sup>87)</sup>が沈没した際、丁度日本に戦いを仕掛けられた諸船の中では、弾薬が不足して無防備な状態になった。李の旗艦に仕えていたフォン・ハンネケンとタイラーは、中国の命運は天津機器局に掛かっていると李に打電し、機器局に対しみずから生産品を沢山造るよう促すことを要求した。李は、そのようにしなかった。しかし、1箇月の内にいくらかの砲弾が船で出荷された。それには、張佩綸からの書簡が添えられていた。張は、李の娘婿にしてその兵器製造工場の総辦であった。書簡の中で張は、ある種の口径の大きい砲弾が生産され得なかったことを表白している。後に、ある中国人の銃砲士が、丁提督を通してそれを再開するよう試みたが、結果は出せなかった。タイラーとフォン・ハンネケン<sup>88)</sup>は、それ以上は何もしなかった。彼らは、李鴻章と個人的に繋がっている張佩綸が李のために働くのに、彼らの外国人は〔張が〕自分たちに逆らって働くように感じた。彼らの異議申し立てが「例によって、機関全体を転覆させ」たのである。実際、1893年の盛大な海軍閱兵式において、存続して1年の李の艦隊に弾薬不足が既に存在していた。しかし、その時、李鴻章の艦隊が実際よりも強力に見えると李に思い付かせるほど不作法なものは誰もいなかった。<sup>87)</sup>

タイラーは、弾薬不足の責任を「悪名高い」張佩綸に転嫁した。同じく李の海軍に勤める米国人フィロ・マクギフン (Philo McGiffen) も、「陸の汚職と背信行為」をほのめかした。中国人歴史家の一人は、日清戦争中、弾薬の中に大砲に合わないものがあり、その責任は天津の常設機関にあると記述している。その常設機関の職員に日本のスパイがいたようで、とりわけ彼らは輸送船「高陞号」の航行に関する情報を与えた。そして日本がこの船を沈没させたことで実際に戦争が始まった。これらの職員達は苦難の数箇月間、補給線を故意に妨害した。<sup>88)</sup>その時、李鴻章の「後路」は機能しておらず、紙の上にあるだけのものであった。

もし李鴻章の補給が標準化されていなかったなら、中国の他の場所では補給体制はなかったし、沿岸の要塞で使われた型の大砲はなかった。これらの要塞では、クルップとノーデンフェルトとアームストロングが通常使用されていた。単一の補給体制は、存在しなかった。1898年にロード・ベレスフォードは、中国の沿岸と河川にある約40ほどの要塞を訪れ、「思い浮かぶあらゆる種類の大砲」を書き留め、ほとんどの要塞が依然として前装式を使用していると陳べている。イギリスかドイツ仕様で、しばしば中国で生産された「極上の」後装式を有する要塞もあった。しかし、ほとんどの要塞は、中国製の火薬を使っていた。明らかに、中国製の火薬は、実弾を勢いよく飛ばすよりも、むしろ大砲を破裂させる傾向があった。ある要塞において、ベレスフォードは、これは容器 (case) であろうかと思った。そして、その火薬が実はある時兵器を台無しにしたと言葉少な<sup>88)</sup>に知らされた。彼は、アームストロングの砲尾にクルップが付けられているのを見たが、それはもともと存在した部分が吹き飛ばされてしまったのである。しかしベレスフォード

は、「これらの大砲は、上海機器局で立派に改造されていた」ことを認めた。<sup>89)</sup>ベレスフォードの記録は、戦後に書いたものであるにもかかわらず、なお有用である。彼は暗黙の内に、日清戦争が軍事的進歩に向けた強力な刺激ではなかったことを示唆しているからである。

その直前の資料は、日清戦争前夜において、確固たる海岸要塞への関心がまだ大いに見られたことを暗示している。李鴻章は、そうした海岸基地の傑出した建設者であった。その恰好の例が、直隸の軍事基地を擁する彼の堅牢な港なのである。

旅順港の要塞は、非常に強い印象を与える。その東部は32エーカーに及ぶ水域であり、良く護られていた。入り口の狭い側には、黄金山の天険があり、1894年に3門の8インチ口径クルップ製大砲が狙いを付けていた。別の丘には、数ヤードを占めていた。旅順口を横切り、黄金山の向かい側には、八つの虎尾岬要塞があり、39門の近代的大砲が備え付けられていた。周囲の丘にはもっと沢山の砲があり、最大のもので6インチ以上の口径を備えていた。同時代のアメリカ人は、基地全体が「最も侮りがたい特徴」を持つ防備を創設するために、好機を上手く利用していると評価している。<sup>90)</sup>1894年11月に（背後から）旅順港を接収した際、日本は「極東で最上の造船所」を手に入れた。それは「艦船を修繕するのに必要なものが全て用意されており、……敵国の門戸における素晴らしい海軍作戦基地である。……旅順港は6,000万円の価値がある。つまり約600ポンドスターリングに相当する価値がある」という。<sup>91)</sup>

湾の向かい側には、威海衛がある。ここには素晴らしい港がある。港の入口の向こう側には島（劉公島、黄島、日島）があったので、船は、劉公島及び西岸の要塞を右にして西進する以外進入できなかった。島の上や港周辺の丘には17の要塞があり、4インチから10インチの大砲55門が据え付けられた。その中には、速射砲もあった。島の大砲のうち4門は、つい先頃姿を消した型であった。大砲は、海にだけ向けられていた。港の入口は、5列の水雷、4重の磁気機雷、それらがっちりとした防材によって防御されていた。それは、重くて大きな材木の上に浮かべられ、根底まで上手く据え付けられたもので、三本締め絞られた3インチの鋼鉄製の綱により造られていた。<sup>92)</sup>

大連湾における李の〔軍艦〕碇泊地も、18門の大型砲で要塞化されていた。一番後に挙げられた事業は、資金不足のためずっと停止されていたとはいえ、<sup>93)</sup>錦州、芝罘、膠州湾にも、要塞があった。

イギリスの海軍史家バラードは、李鴻章の艦隊と共存する、これらの諸港は、朝鮮の李舜臣<sup>イスンシン</sup>総司令官が4世紀前に日本の企てを阻んだのと同様に、日本を頓挫させるために開発されてきたのであり、中国に戦略上の優位性を与えたと陳べている。1590年代と同様に、1890年代において、中国にとって海洋での敗戦は、全面的な敗戦を意味する必要はなかった。それは、攻撃的な日本と同様なのである。<sup>94)</sup>李鴻章は朝鮮を防衛したいと望む者にとって好位置にいた。そして、彼の要塞の位置取りからみるに、彼は自分の防衛施設を最終的な中枢地点すなわち旧大沽港に置いてはいないが、彼の防衛上の配置において、伝統的というよりは、より外向型の戦略思想を表していたことは明白である。

南洋の沿岸にも、要塞が数多く配置されたのであるが、日清戦争の時には、ほとんど必要とされなかった。1891年に海南当局は、8インチまでのクルップ砲5門のために、水営において新しい要塞の建設を推進した。台湾では、巡撫の劉銘伝<sup>りゅうめいでん</sup>が、精力的に「巨大な土塁」を組み立て、

「有名なドイツの会社」から手に入れた大砲を据え付けた。劉の要塞は「数世紀の間指図されてきた型式」に基づいていると外国人に指摘されている。1892年に一人の英国人は、沿岸及び河川の要塞に繋がれた中国が万里の長城の精神をまだ引き合いに出しているとの考えを信じていた。<sup>95)</sup>

その一方で、戦前の中国海軍においては、伝統的な要素が情勢の中で現れた。1893年に伝統的な長江水師は、陸地に駐屯して楽をしていると警告を受けた。伝統的な沿海水軍はずっと削減されてきたが、近代的な艦隊に置き換えられてきたのではなかった。<sup>96)</sup> 港湾の封鎖は、まだ旧来の方法で実行されていた。1894年に寧波当局は、危機の最中であって、材木の山を移動し、石のいっぱい入った廢品<sup>ジャンク</sup>を沈めた。1894年6月2日に3隻の日本艦船が不吉な「特別訪問」をした後で福州に接近した際に、官吏は同様のことを行った。明らかに福州当局は、1884年にフランスが福州船政局の潰滅に先行する数週間に海軍を侵入させた事態を二度と許さない積もりであった。<sup>97)</sup>

しかし港の閉鎖は、旧式の道具を用いて遂行されただけではない。寧波は、水雷も準備していた。上海の防御は、水雷がまかれた（いかにもお粗末にまかれたのだが、戦後に勇敢な洋関員により片付けられる前に、帆船に乗った多くの人々が、何も知らないまま、爆発により吹き飛ばされバラバラになった<sup>98)</sup>）。港湾封鎖の支配権を握ったのは、多分張之洞であった。1886年には既に、外国領事が怒って反論したにもかかわらず、張は広東の恒久封鎖を命じた。張は、大量の石材<sup>はしぐい</sup>と橋杭を沈めることで〔沙面の河を塞ぎ〕、狭い水路だけを残しておいたのである。それで、こうした平時の活動に対し、多くの外国人は悪罵を浴びせた。そうした罵<sup>ののし</sup>りの声は、彼らは「非常識だ」と英国人が論評したことに要約されよう。<sup>99)</sup>

港を封鎖して待ち受けるという古い定石<sup>じょうせき</sup>は、多分上海で最も「近代的」に適用された。その場所で主要な防御は、国際法であった。江南製造局が生産物を造り船で運搬し続けていたとはいえ、劉坤一は、国際協定を通じて上海を軍事領域外の文民地区に分類しようとした。貿易を渴望する外国人官吏は、この点で総督〔劉坤一〕を支持した。もし貿易が継続できるのであれば、中国に上海以外の場所で戦争をさせよう〔という魂胆である〕。劉坤一は上海を分離するための協定に成功した。しかし、それにもかかわらず、劉は吳淞<sup>こしゅう</sup>の河底に石を投げ落とすという予防措置<sup>100)</sup>を採った。

沿岸防衛の備えが多様であることは、帝国の政治的分裂が継続していること、並びに伝統的戦略が継続していることを物語っている。しかし戦前の数年間に、時折、より近代的な戦略思想が現れることがあった。李鴻章の海軍トレーナーであるラング艦長は、戦間期に旗を掲げたまま李の艦船を南洋に出航させた。そして、1894年6月に日本の艦船3隻が福州に「礼儀正しい訪問」を行ってからというもの、当地の総督〔譚鍾麟<sup>たんしゅうりん</sup>〕は、河に石を投げ捨てるだけでは満足しなかった。彼は総理衙門に対し、日本に6隻の中国軍艦を派遣し、同じような「礼儀正しい」訪問<sup>101)</sup>を行う必要性も力説したのである。

李鴻章は、フルに展開された武装艦隊が外交上有用であることを正しく認識した最も良い例である。1886年に李は、引き渡されたばかりの「鎮遠」と「定遠」を朝鮮に派遣した。朝鮮では、英国軍が巨文島<sup>コマン</sup>を占拠していた。1891年には、最良の戦艦6隻を日本に派遣した。その巡航は、偶然の事ながら、朝鮮をめぐる両国間の緊張の高まりと期を同じくして発生したのである。<sup>102)</sup>

この数年間、西洋も海軍の戦略について不確かであった。イギリスですら、海軍の威信は失墜し、陸軍の備えが強調されたのである。イギリスの重装備海岸要塞である「パーマストンの狂

気」は、国家防衛の「積み木とモルタルの学校」の人気を手堅く証明している。驚くほどのことではないが、英国海軍の人員により成り立っていた「青い海の学校」は、1880年代中期の英仏危機後、ゆっくりと自己主張を始めた。英国海軍当局は（アメリカのマハン Mahan と共に）、制海権を持つ敵は、イギリスを侵略する必要がないという考えを強調した。敵はイギリスを餓死させることができるからである。世紀末のイギリスでは、陸軍の軍人との激しい論争があった。陸軍の軍人は、鉄甲艦は互いに衝突しやすいとか、或いは暴風が吹けば散らばってしまうと主張し、自国の沿岸を防御するための強力な軍隊を要求したのである。<sup>103)</sup>

海軍戦略に関する「科学」は、蒸気、鋼鉄、砲弾の影響力により作り直されつつあった。1905年に至ってなお、板張りの基地（boarding station）やソード・カトラス（sword-and-cutlass）〔拳銃の一種〕の訓練が、英国軍人の中では標準であった。そうした演習は、大型海軍砲の潜在力を十分に認識するよりも、むしろ混戦に関する戦術思想や衝角艦の使用に未練がましい愛着を示した。兵器体制における変革には、熱烈な戦略論争が伴うことが、よく分かる。

しかしながら、中国の指導者が外国人海軍助言者にこうしたあやふやな不確実性だけを抱いていたのは、全く真実ではない。結局、中国においては「中国的な」要因が存在していたのである。中国には、真の国家的な議論が無かった。むしろ、個々の防衛配置が存在していて、新旧の思想が様々な形で現れていた。そして、ごちゃまぜの寄せ集め仕事を行ったために、依然として多くの軍用帆船の域を出ない諸艦隊が混ぜこぜになったのである。<sup>104)</sup>もし「国家的戦略」の例があるとすれば、それは〔皮肉なことに〕頤和園を一新する決定において存在したのである。

#### 註

- 1) 左宗棠の建議は、デンビィ（Denby）からベヤード（Bayard）に宛てた1885年10月16日付の文書の中で翻訳されている。*Foreign Relations of the United States*（1885），pp.178-180. 左の上奏文の日付は、1885年5月25日（光緒十一年四月十二日）である。『皇朝政典類纂』巻342，4～5頁。
- 2) 張佩綸の提議については、『皇朝政典類纂』巻342，5～6頁，参照。許景澄の提議については、ハンメル編『清代名人伝略』の「許景澄」の項目を参照のこと。〔訳註：Authur W. Hummel, ed, *Eminent Chinese of the Ch'ing Period, 1644-1911*, Washington, D. C., 1943-44, pp.312-313. 許景澄は、出使法徳意和奥五国大臣として1884年9月6日に上海を出航し、11月2日のベルリンを皮切りに、ローマ（12月31日）、ウィーン（1885年1月29日）、パリ（7月27日）、ハーグ（12月21日）で、彼の信任状を提出した。1885年には、ベルギー公使も兼任した。許は中国がドイツに注文していた2隻の軍艦を事前に検分する任務に当たった。本文で触れられているように、19箇国の海軍力に関する許の研究は、1885年に『外国師船図表』（12巻）と題されて皇帝に献上された。〕
- 3) デンビィからベヤードへ、1885年10月14日付。*Foreign Relations of the United States*（1885），pp.173-174. から引用。詳しくは、『皇朝政典類纂』巻342，7頁。〔訳註：西太后による懿旨は、軍機大臣も指令の対象としている。『光緒朝東華録』光緒十一年九月辛丑（初六日）の条。〕
- 4) ハート（Hart）から外務省のパウンスフォート（Pauncefote）へ、1885年10月17日付。Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, Belfast, 1950, p. 480. に引用されている。〔訳註：宣宗道光帝には九子おり、醇賢親王奕譞は、その第七子である。それでハートは、文中で「七番目の親王（Seventh Prince）」と呼んでいるのである。奕譞は、文宗咸豊帝が即位して、醇郡王に封じられ、次代の同治十一年（1872）に醇親王に進封された。『清史稿』列伝8，諸王7，参照。〕
- 5) デンビィからベヤードへ、1885年10月16日付。*Foreign Relations of the United States*（1885），pp.178-180.

- 6) Li Chien-nung, *The Political History of China, 1840-1928*, tr. Ssu-yu Teng and Jeremy Ingalls, New York, 1956, pp. 125-126. [訳註：李劍農『中国近百年政治史』（上）、台湾商務印書館、152～155頁。]
- 7) Meng Ssu-ming (蒙思明), "The Organization and Functions of the Tsungli Yamen." Ph. D. thesis; Harvard University, 1949, Chap. 6. このほかに、こうした政治的考察を議論しているのは、J. O. P. Bland and E. Backhouse, *China Under the Empress Dowager*, (Philadelphia, 1911), pp. 159-160, ハンメル編『清代名人伝略』の「奕譞」の項目である。[訳註：前者の邦訳として、『西太后治下の中国——中国マキャベリズムの極地』（藤岡喜久男訳）、光風社選書、1991年、がある。後者については、Hummel, ed, *Eminent Chinese of the Ch'ing Period*, vol. I, pp. 384-386.] また、後ろの註13も併せて参照のこと。
- 8) ハンメル編『清代名人伝略』における「奕譞」の項目を参照のこと。
- 9) 包遵彭<sup>ほうじゅんほう</sup>『中国海軍史』（1951年）、209頁は、海軍衙門が海防経費を制御する許可を得ていた証拠を示している。
- 10) 『海軍函稿』[巻1、1～3頁] 1886年1月3日付。[訳註：本文で触れられたような、それまで南北洋大臣の所管であった南北洋海防経費が、海軍衙門の管理に撥歸するに至った制度上の改変は、李鴻章が提議したのではなく、正しくは戸部の奏准を経て成立した。包遵彭『中国海軍史』（中華叢書）下冊、1970年、624頁、に拠る。]
- 11) Li Chien-nung, p. 126. [訳註：前掲、李劍農『中国近百年政治史』（上）155頁。] 曾紀沢は、そのポストを断ろうとした。
- 12) 発注に言及している裴の文書は、『船政奏議彙編』巻34、10～12頁。戸部の指令は、幾分弱々しく終わっている。というのも[各省による購買の全面禁止ではなく、その余地を残しており]、もし各省が独自に購買する場合、その省は財政難に喘いでいても、支払いのための独自財源を考案しなければならぬと警告されたからである。裴は皇帝直属大臣であり地方官僚ではなかったため、省財政から資金を調達する手段を持たなかった。
- 13) 『清季外交史料』巻66、16頁、16～17頁。李鴻章は明らかに、醇親王が海軍衙門の首席として留まることを望んでいた。というのも、1886年7月16日に李鴻章は、醇親王に書簡を送り、彼が辞職しないように促していたからである。問題は、光緒皇帝が王位に昇るかもしれないことであった。『海軍函稿』巻1、30～31頁、参照のこと。
- 14) 1888年6月23日における宮廷の裁可は、『船政奏議彙編』巻36、1～4頁、18～22頁；巻38、15～19頁。
- 15) 『清季外交史料』巻85、9～11頁、1882年7月9日付。
- 16) 『李文忠公全集』の『海軍函稿』には、1888年から1894年に至るまでの海軍衙門宛書簡が、115通以上収められている。鉄道に関する一例としては、『清季外交史料』巻80、13～14頁、1889年5月5日付も併せて参照のこと。本件は、海軍衙門に鉄道建設計画を作成するよう命じる勅令である。蒙思明は著書の124頁で、鉄道建設と鉱山は、防衛と密接に関連していたため、「自動的に」海軍衙門に取り次がれたと陳べている。
- 17) Stanley Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, Seattle, 1964, pp. 186-190, 226-227.
- 18) 李鴻章による懐柔的な意思表示は、友人の一人呉徽隠<sup>ごひいん</sup>への書簡の中に現れていた。そこで李鴻章は、造船所が資金不足に陥っていて、他の全ての地方は自分の艦船をそこから注文しなければならないことを記していた。『朋僚函稿』巻24、25頁、1886年8月18日付。呉仲翔については、『船政奏議彙編』巻31、25～26頁、1886年1月14日付を参照のこと。呉は、確かに福州に戻った。のちに呉は、福州から広州へ異動していたからである。次の第八章を参照のこと。
- 19) 『清季外交史料』巻84、25～27頁、1891年7月28日付。[訳註：本文で陳べられているように、劉坤一は两江総督を前後三期務めた。任期は、次の通り。  
第一期：1875年1月12日～9月1日（病気により免職になった李宗義の代理）

第二期：1879年12月27日～1881年8月22日（病没した沈葆楨の後任）

第三期：1890年11月22日～1894年11月2日（死去した曾国荃の後任）

- 20) 李鴻章の地位について論じるのは, Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, pp. 189-194, 259-261.
- 21) 詳しくは、『北洋海軍章程』を参照のこと。また、『海軍函稿』巻3, 7～8頁, 1888年7月15日付の書簡も参照のこと。この書簡では, 中国はイギリスを完全には模倣できないことや〔イギリスの章程で要求を満たせないところは, ドイツ方式を参考にするか, 或いは〕中国の旧例に違ったことを論じている。
- 22) 『北洋海軍章程』第二冊, 「官制」。規則の幾つかの部分には, 別々に頁が割かれている。包遵彭『中国海軍史』（1951年）の139頁に, 丁・林・劉の名が挙げられている。
- 23) 『北洋海軍章程』第一冊, 「船制」。
- 24) 『北洋海軍章程』第一冊, 「船制」。
- 25) 『北洋海軍章程』第三冊, 「考校」。
- 26) 条約原案については, 『北洋海軍章程』第二冊, 特に3～4頁。
- 27) 池仲祐『海軍大事記』336～337頁。〔訳註：1871年に余雄飛が率いた3隻は, 「広甲」, 「広乙」, 「広丙」。郭宝昌が率いた6隻は, 「寶泰」, 「南琛」, 「南瑞」, 「南濟」, 「鏡清」, 「保民」である。なお, 本文では北洋艦隊の参加は4隻とされているが, 池仲祐に拠ると, 丁汝昌提督は, このとき「定遠」, 「鎮遠」, 「濟遠」, 「致遠」, 「經遠」, 「來遠」, 「超勇」, 「揚威」, 「平遠」, 「康濟」, 「威遠」の11隻を率いて演習に参加している。〕
- 28) W. F. Tyler, *Pulling Strings in China* (London, 1929), pp. 41-42.
- 29) 左宗棠の死去に関するハートの論評については, *China, Imperial Maritime Customs, Returns of Trade and Trade Reports: Dec. Repts., 1882-1891*, Foochow (福州), pp. 426-427. を参照のこと。左の勧告については, デンビィからベヤードへ, 1885年10月16日付, *Foreign Relations of the United States* (1885), pp. 178-180.
- 30) 1885年7月19日付及び1886年1月6日付の裴報告は, 『船政奏議彙編』巻28, 5～7頁。
- 31) *China, Imperial Maritime Customs, Returns of Trade and Trade Reports: Dec. Repts., 1882-1891*, Foochow (福州), pp. 426-427.
- 32) 工場施設の発展に関する裴の1887年報告については, 『船政奏議彙編』巻25, 1～7頁。戦後の造船計画については, 『船政奏議彙編』巻27, 7～10頁に収められた裴の報告を参照のこと。
- 33) 1885年12月1日付, 裴の報告。『船政奏議彙編』巻30, 5～9頁。
- 34) 1886年11月28日付, 裴の報告。『船政奏議彙編』巻34, 6～7頁。水雷艇の「福龍」<sup>ふくりゅう</sup>は, 結局は北洋海軍に移った。それは, ドイツから中国へ単独で航海してきた144フィートの船であった。
- 35) 1886年11月3日付及び12月11日付, 裴の報告。『船政奏議彙編』巻34, 1～5頁, 14～16頁。〔訳註：この史料に拠ると, 本文中で「指示された型式の軍艦を建造する」とは, 「穹甲快船」を模造することである。〕
- 36) 李鴻章から海軍衙門へ, 『海軍函稿』巻2, 22頁。〔訳註：「議崎案並驗收新船回華」と題されたこの書簡で, 李鴻章は, この処理法を自ら願い出た琅威理（ラング）が, 明るる光緒十三年（1887）二月にイギリスとドイツに赴き, 4隻（「致遠」「經遠」「靖遠」「來遠」）の引き渡しを受けたのち, 「統帶員弁」が船を運転して中国に戻ることに決めたとし, 外国人を雇って中国に運ぶよりも費用が節約できる（すなわち, 本文で記述されているように, 20万両で事足りる）と陳べている。〕
- 37) 裴による報告。『船政奏議彙編』巻36, 7～8頁, 10～12頁；巻37, 1～2頁。
- 38) 引用については, E. H. Parker, *John Chinaman and a Few Others* (New York and London, 1902), pp. 19-20. を参照。裴の苦言については, 『船政奏議彙編』巻36, 1頁；巻36, 2頁（1887年7月5日付）；巻36, 19頁（1887年11月31日付）；巻37, 21頁（1888年4月16日付）；巻39, 11～12頁（1889年8月11日付）；巻38, 18頁（1889年9月4日付）。

- 39) 『船政奏議彙編』巻43, 33頁, 1891年1月4日付; 巻44, 12~14頁, 1891年11月26日付。
- 40) 計算の基礎とした会計年度総額については、『船政奏議彙編』巻40, 10~11頁, 1881年2月3日付; 巻42, 2~4頁, 1889年1月3日付; 巻44, 19頁, 1891年2月8日付; 巻45, 17~18頁, 1893年2月5日付。『清史稿』「兵志」, 巻7, 10~12頁, は, 船政局の支出総額を示しているが, その額は40年余で1,900万両であるとしている。
- 41) 李鴻章の財政問題に関する議論については, Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, の第7章「軍事財政に関する諸問題」を参照のこと。詳細は, 同書, 表11 (222頁), 表14 (225頁), 表5 (202~204頁) を参照のこと。
- 42) 李鴻章の報告を参照。『清季外交史料』巻48, 13頁。
- 43) 諸船に関する通信は, 『清季外交史料』巻61, 17頁, 1885年10月23日付; 巻61, 21頁, 1885年10月28日付; 巻61, 21~22頁。また李鴻章から曾紀沢への書簡は, 『朋僚函稿』巻24, 21~22頁, 1886年1月13日付; 巻24, 23頁, 1886年6月13日付。ラングの任務については, 池仲祐『海軍大事記』, 335頁。Ching Yuan と名付けられた2隻の船の中国名〔「靖遠」「経遠」〕については, 付録C〔訳註: 本稿では割愛する〕を参照のこと。
- 44) 李鴻章は, 喫水の深い船として, 「定遠」, 「鎮遠」, 「濟遠」, 「超勇」, 「揚威」を列挙した。李は, 地方の役割を割り当てる数隻の艦船として, 福州船政局で建造されたものを列挙した。李は, 素人が海軍問題に首を突っ込むことを許すのは危険であると陳べている。〔『海軍函稿』巻1, 1~3頁〕。
- 45) 池仲祐『海軍大事記』, 335頁。『清史稿』「兵志」7, 5頁。魚雷艇のうちの1隻である「左一」号はイギリスからもたらされ, 他はドイツからもたらされた。〔訳註: ドイツから購入した魚雷艇は, 「左二」, 「左三」, 「右一」, 「右二」, 「右三」の5隻である。文中の浚漂船1隻も, ドイツから購入した。『清史稿』「兵志」7, 中華書局標点本, 第14冊, 4037~38頁。〕
- 46) 包遵彭『中国海軍史』(1951年), 209~210頁。
- 47) 海軍衙門に対する1886年の書簡は, 『海軍函稿』巻1, 18頁, 3月11日付; 19頁, 4月27日付; 20頁, 6月25日付及び30日付; 10頁, 1月21日付(解任〔を檢討するよう指示した西太后の懿旨が下〕された日である)。醇親王から李鴻章への12月13日付書簡は, 『海軍函稿』巻2, 23頁。李鴻章が12月13日及び1887年1月3日に行員と交わした対話は, 『海軍函稿』巻2, 24頁, 及び26頁。湖における宮廷女子に関する情報については, C. B. Malone, *History of the Peking Summer Palace* (Urbana, 1934), pp. 197-198.
- 48) 総額については, 『北洋海軍章程』第二冊, 「支出総額」を参照。李鴻章が艦船を切望していたことについては, 『海軍函稿』巻3, 7~8頁, 1888年7月15日付, 参照。
- 49) Malone, *History of the Peking Summer Palace*, p. 198.
- 50) 包遵彭『中国海軍史』(1951年), 213頁に, 林紹年の伝記が引用されている。
- 51) 包遵彭『中国海軍史』(1951年), 210~211頁。
- 52) 包遵彭『中国海軍史』(1951年), 211~213頁。
- 53) 包遵彭『中国海軍史』(1951年), 213頁。
- 54) Malone, *History of the Peking Summer Palace*, p. 198.
- 55) Bland and Backhouse, *China Under the Empress Dowager*, pp. 99-100. 海軍衙門は, 李鴻章への資金供給を完全に停止することはなかった。1894年10月に李鴻章は, 海軍衙門と戸部からそれぞれ150万両を受け取った。『清季外交史料』巻98, 7~10頁。1883~1891年の期間中, 李鴻章の海軍費は834万両に上った。Stanley Spector, "Li Hung-chang and the Huai-chun," Ph. D. thesis (University of Washington, 1953) p. 490. を参照のこと。
- 56) *Ibid.*, p. 406.
- 57) Malone, *History of the Peking Summer Palace*, p. 198.
- 58) 南洋の支出については, 劉坤一による1891年7月29日付上奏文を参照のこと。『清季外交史料』巻84, 25~27頁。

- 59) Malone, *History of the Peking Summer Palace*, p. 198.
- 60) シルからグレシャムへ, 1894年6月28日付。付録 I, “Chinese-Japanese War (日清戦争),” *Foreign Relations of the United States* (1894), p. 25.
- 61) 包遵彭『中国海軍史』(1951年), 214~215頁。
- 62) 池仲祐『海軍大事記』337~338頁。
- 63) 『海軍函稿』巻4, 18~20頁。
- 64) 芝罘における1891年, 1892年, 1893年の通商に関する報告は, *British Parliamentary Papers*: “Diplomatic and Consular Reports,” 1892, v. lxxxi, 12; 1893, v. xcii, 13-14; and 1894, v. lxxxv, 10, 65. を参照のこと。
- 65) James Allan, *Under the Dragon Flag* (New York, 1898), p. 34. アメリカの冒険家であるアランは, 「超勇」に勤務していた外国人技師のパーヴィス (Purvis) と対話している。彼は, その船の状況を詳しく記録していた。
- 66) 包遵彭『中国海軍史』(1951年), 214頁。
- 67) 池仲祐『甲午戦事記』376~377頁。『清季外交史料』巻95, 1~3頁, 1894年8月31日付。
- 68) 包遵彭『中国海軍史』(1951年), 214頁。
- 69) 劉坤一による報告, 1891年7月25日付。『清季外交史料』巻84, 25~27頁。李鴻章は海軍衙門に書簡を送り, 南洋艦隊は航海に耐える艦船を3隻持っているとして, 「南琛」, 「南瑞」, 「開濟」の名を挙げている。『海軍函稿』巻2, 3頁。池仲祐『海軍大事記』は, 4隻の砲艦〔訳註: 「寰泰」, 「鏡清」, 「開濟」, 「保民」〕に言及する (342頁)。
- 70) 池仲祐『海軍大事記』338頁。
- 71) 広東の施設については, 『清史稿』「兵志」7, 17頁。 *Imperial Maritime Customs, Returns of Trade and Trade Reports: Dec. Repts., 1882-1891*, Canton (広東), p. 575. デンビーからブレインへ, 1889年3月12日付, *Foreign Relations of the United States* (1889), p. 108. Charles Beresford, *The Break-Up of China* (New York, 1899), pp. 301-302; そしてラファージ (LaFarge) は, 広東の製造局は, 福州船政局をモデルにしたと書いている (9頁)。廈門のドックについては, H. W. Wilson, *Ironclads in Action*, (Boston, 1898), II, p. 61. 及び, *United States Naval Institute Proceedings*, 14.1: 278-279 (1888). の「文献解題」を参照のこと。南京については, Beresford, *The Break-Up of China*, pp. 298-299. を参照のこと。漢口の工廠についての記述は, 長官から鈺務局に宛てた, シェルトワイラー (Scheltweiler) による1892年10月16日付報告を参照のこと。張之洞による認可については, *Imperial Maritime Customs, Returns of Trade and Trade Reports: Dec. Repts., 1882-1891*, Hankow (漢口), pp. 187-190; それに, Beresford, *The Break-Up of China*, p. 299. を参照のこと。その数字は, 成都, 吉林, 台北, 淡水の軍需工場を無視していて, その時期の交戦において計算したのではない。『海防档』の「江南」は, これらの工場に関する広範な材料を含んでいる。
- 72) J. W. McClellan, *The Story of Shanghai* (Shanghai, 1889), pp. 64-66; “Bibliographical Notes (文献解題),” *United States Naval Institute Proceedings*, 14.1: 278-279 (1888).
- 73) 『清史稿』「兵志」7, 19頁。McClellan, *The Story of Shanghai*, pp. 64-66.
- 74) “Bibliographical Notes (文献解題),” *United States Naval Institute Proceedings*, 14.1: 278-279 (1888). 上海区域の他のドックについては, *Imperial Maritime Customs, Returns of Trade and Trade Reports: Dec. Repts., 1882-1891*, Shanghai (上海), p. 317. を併せて参照のこと。頁317。H. W. Wilson, *Ironclads in Action*, II, p. 61, は, 比較するに有用な日本のドックを論じている。
- 75) *Imperial Maritime Customs, Returns of Trade and Trade Reports: Dec. Repts., 1882-1891*, Shanghai, p. 338. McClellan, *The Story of Shanghai*, pp. 64-66, は, 外国人に関する他の印象について言及している。
- 76) Hilary A. Herbert, “Military Lessons of the Sino-Japanese War,” *North American Review*, 160:

- 685-698 (June 1895).
- 77) Beresford, *The Break-Up of China*, pp.294-298.
- 78) 台湾巡撫については、『清季外交史料』巻95, 4～6頁, 1894年8月31日付; McClellan, *The Story of Shanghai*, pp.64-66, における西洋人の論評。
- 79) 『海軍函稿』巻1, 8～9頁, 1886年1月3日付。また『清史稿』「兵志」7, 17頁。李鴻章の工場施設(火薬工場)における改良については, H. Marionが, *United States Naval Institute Proceedings*, 14.3: 615 (1888). の「文献解題」で, 中国の火薬工場に関する一書の抜粋をしている。1898年にベレスフォードは, 天津機器局を称賛した。しかし, 機器局の総辦は, 十分な給料を受け取っていないとイギリス人特有の表現で陳べた。Beresford, *The Break-Up of China*, pp.292-294.
- 80) 『海軍函稿』巻1, 1～3頁, 1886年1月3日付。池仲祐『海軍大事記』334頁, は, 李鴻章の艦船が長崎を訪問したことに言及する。長崎訪問では, 李の水兵と日本警察との間に流血騒ぎが発生し, 丁提督は法的解決を選んだにもかかわらず, ラングは宣戦の必要性すら説いた。国内で修繕を行うべきもう一つの理由である。
- 81) 旅順港に関する李鴻章の報告は, 『清季外交史料』巻84, 33～36頁, 1891年10月29日付。Allan, *Under the Dragon Flag*, p.40, は, 港を守るために旅順港の専門技師達によって水雷が据え付けられたが, 常に適切に整えられた訳ではなく, 水上に現れたものもあったと陳べている。
- 82) 『北洋海軍章程』第二冊, 14条, 「後路」。
- 83) 『海軍函稿』巻1, 9頁, 1886年1月3日付。
- 84) Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, pp.407, 603.
- 85) 購買に関する報告は, 『清季外交史料』巻95, 12頁, 1894年9月14日付。
- 86) 「コロンビア」号の航海については, Allan, *passim*, を参照のこと。しかしながら李鴻章は, 彼の Ching Yuan の双方に, ちょっとした装備の標準化を行っただけ。「海軍年鑑 (*The Naval Annual*)」(1894年), 中国の項によると, 李が1885年に購入した, 英国製の「靖遠」とドイツ製の「経遠」には, 水雷管が備え付けられていたが, どちらの船にもブラッセイ (T. A. Brassey) による(水中で泳ぐ)「魚」の意匠が描かれていた。[訳註: この2隻の船名は, いずれも中国語で Ching Yuan と表わされる。ここで原著者は, 呼び名も同様に標準化してますよとジョークを飛ばしているのである。]
- 87) W. F. Tyler, *Pulling Strings in China*, London, 1929, pp.39-43.
- 88) 張佩綸については, *ibid.*, p.50, を参照のこと。また, Philo McGiffen, “The Battle of the Yalu, Personal Recollections by the Commander of the Chinese Ironclad *Chen Yuen*,” *Century Magazine* (August 1895), p.593. 池仲祐『甲午戦争記』380頁, は, 裏切った船員について言及している。
- 89) 訪問した要塞に関する報告については, Beresford, *The Break-Up of China*, chap.22, esp. p.291. を参照のこと。
- 90) 詳しくは, Inouye Jukichi (井上十吉), *The Japan-China War* (Shanghai, n. d.), Appendix 31. また, “Vladimir,” の223頁も参照のこと。
- 91) “Vladimir,” の231頁。作者は, たいそう日本最良であった。日本の勝利を過大評価しているかも知れない。
- 92) Richard Wallach, “The War in the East,” *United States Naval Institute Proceedings*, 21.3: 723,725 (1895), は, 威海衛に対し軽蔑的に言及している。詳しくは, Inouye Jukichi, *The Japan-China War* の付録26及び27, そして, “Vladimir,” の276頁。
- 93) 大連湾については, 井上「撰政の剣について」, 8頁。芝罘については, “Report for the Year 1892 on the Trade of Chefoo,” *British Parliamentary Papers*: “Diplomatic and Consular Reports,” v. xciii; *Imperial Maritime Customs, Returns of Trade and Trade Reports: Dec. Repts., 1882-1891*, Chefoo, pp.74-75, 及び, *ibid.*, 1892-1901, Chefoo, pp.66-67. を参照のこと。膠州について

- は、『皇朝政典類纂』巻342, 9頁: *IMC: Dec. Repts., 1882-1891*, Kiaochow, p.74, そして, *ibid., 1892-1901*, Tsingtao, p.89. を参照のこと。
- 94) G. A. Ballard, *The Influence of the Sea on the Political History of Japan*, New York, 1921, p. 1.
- 95) 水営については, “Report for the Year 1891 on the Trade of Kiungchow,” *British Parliamentary Papers*: “Diplomatic and Consular Reports,” 1892, v. lxxxii. を参照のこと。台湾については, *BPP*: “Commercial Reports,” 1886, v. lxvi, Tamsuy and Keelung (淡水と基隆), p. 27. を参照のこと。1892年の英字評論は, “Report for the Year 1892 on the Trade of Chefoo,” *BPP*: “Diplomatic and Consular Reports,” 1893, v. xcii. に拠る。
- 96) 福建水師に関する1889年の記事については, 『清史稿』「兵志」6, 9頁。1893年に, 整理を繰り返すことで, 軍隊を削減して30の軍用船とした。『清史稿』「兵志」6, 9頁。
- 97) *Imperial Maritime Customs, Returns of Trade and Trade Reports: Dec. Repts., 1882-1891*, II, Ningpo, p. 37. 福州については, 『清季外交史料』巻92, 2頁, 1894年7月3日付を参照のこと。
- 98) Tyler, *Pulling Strings in China*, p. 113.
- 99) 領事の対応については, “Report for the Year 1887 on the Trade and Commerce of Canton,” *British Parliamentary Papers*: “Diplomatic and Consular Reports,” 1888, Vol. 100. 石材を常置することに関する張之洞の考えについては, 『清季外交史料』巻66, 1～3頁。
- 100) この件について十分に論じるために, 別の評論を取り上げよう。劉坤一には, 定見がなかった。日本人は, 思考を変化させた。軍需工場の問題, イギリスの利害などが存在した。劉坤一は, 1894年7月末に総理衙門に宛てた電報の中で問題を提起した。『清季外交史料』巻93, 10頁。1894年12月の通信については, 『清季外交史料』巻93, 13頁, 15頁; 巻94, 頁2; 巻95, 9頁, 4～6頁; 巻100, 12～13頁。デンビーは, 1894年9月15日グレシャムに要約したものを送っている。*Foreign Relations of the United States* (1894), Appendix I, pp. 58-59.
- 101) 『清季外交史料』巻92, 2頁, 1894年7月3日付。〔訳註: 譚鍾麟は, 1892年6月から1894年11月まで閩浙総督。〕
- 102) こうした巡航については, 池仲祐『海軍大事記』334頁, 338頁。
- 103) 英国の戦略的論争については, A. J. Marder, *The Anatomy of British Sea Power* (New York), の第6章が要約している。
- 104) 長江水師は, おそらく官吏に対し陸地駐屯の中止を命じること等で強化されたであろう。提督黄翼升は, 協力策を携えて閩浙〔福建と浙江〕の官吏に接近した。浙江には2隻の輸送用汽船があり, 福建には3隻あった。そして彼は, それらの共同演習を計画した。『清史稿』「兵志」6, 9頁。

## II 海軍の訓練

清仏戦争から日清戦争までの10年間に, 中国官僚は, 海軍の訓練への関心を高めた。1890年代の初め, 福州, 広州, 南京, 天津, 威海衛において訓練学校が存在した。そして, もし昆明湖水師学堂を海軍訓練機関と呼んで差し支えなければ, 北京にすら存在した<sup>1)</sup>。

福州船政局の海軍学堂〔福州船政学堂〕は, 明らかに首位の座を失った。1885年に, 福建船政大臣裴陰森<sup>2)</sup>は, 婉曲的な動きをして, 訓練中の生徒に義務付ける海上での時間を増やすよう努めた。清仏戦争直後に, 学堂は保守派〔御史の殷如璋<sup>3)</sup>〕からの別の攻撃に晒された。保守派の言い分は, 船政局の雇用する人員が過剰であり, 費用を無駄遣いしているとの趣旨であり, 部分的には, 帰国した学生技師に支払われる給与が余りにも高すぎるという形を取っていた。裴は,

誰も高すぎる給与を受け取っていないと否定し、左宗棠が復歸した学生に外国人並の給与水準を規定したことを付け加えた<sup>3)</sup>。他方、李鴻章はなお、船政学堂と協力して合同海上訓練を実施した。そして、李がその必要性を説いた後、1886年4月には、福州の第三次留学生が、欧州に向けて出発した。留学生は、福州船政学堂の学生が24名を数え、天津にある李の北洋水師からは9名が選ばれた。訓練生の約半分は〔福州船政後学堂の〕駕駛学生であり、イギリスで適切な訓練——3年間を占め、世界航海を含めている——を終えた後、帰国した。興味深いことには、船政学堂の〔10名の駕駛学生を除いた〕残りの製造学生は、国際法や橋梁建設のような、彼らの元々の専門以外の分野で、より進んだ訓練が行われた<sup>4)</sup>。

第三次留学生は、福州船政後学堂の名簿に記載された生徒を激減させたため、残ったのはたった7人であった。その結果、裴は彼の訓練船〔「平遠」〕を維持するのを止めた。そして、彼の7名の学生を李鴻章の「威遠」に派遣して学習させることを提案した。彼の専属トレーナー〔守備の林高輝<sup>5)</sup>〕は、当面は福州＝台湾間の輸送路に配置した。1894年に新たな留学生の欧州派遣が計画されたが、日本との戦争が発生した<sup>6)</sup>。

1890年代の福州船政学堂には、散発的な仕事しかなかった。活動期間中、福州船政学堂の卒業生は、外国人の教員スタッフを手伝った。こうした状況は、役人の雇用機会が充分でないとする、以前からの不満を沈黙させた。しかし1896年に至って、この実情に関する卒業生の落胆ぶりは、総理衙門から論評を誘発するほど深刻であった。1900年には、外国人の見解に拠ると、福州の学堂は「数年の間ずっと事実上停止していた」<sup>7)</sup>。

広東では、外国の技能を寄せ集めて訓練する学校が長い間存在していた。1880年に、総督の張樹声は、福州船政学堂で教えていた2人の広東人紳士兄弟〔湯金銘・金鑄〕を引き込んだ。1884年に張之洞が張樹声を引き継いだとき、張は50人の学生が、厳格なスケジュールが組まれた、5年間の西洋式カリキュラムに縛られて居残っていることを知った。清仏戦争後、張之洞はその学校を海軍アカデミーを主とするものに変え、引く手あまたの呉仲翔<sup>8)</sup>を福州から招聘した。裴陰森はそれまでに、呉を李鴻章から首尾良く〔福州に〕連れ戻していたのである。呉は50名の学生を福州船政学堂から広東に連れてきた。——本当に福州の学籍簿の涸渇である。広東水陸師学堂の有したカリキュラムは、5年ではなく6年間、すなわち3年の理論学習と3年の海上学習が要求されたとはいえ、福州船政学堂に倣って作られたものである。裴陰森が、福州のカリキュラムで海上の時間を量的に増やすよう切望していたことが思い出される。1889年に、張之洞はもともと広東技術学校（Canton technical school）から移ってきた70名の生徒のなかで、たった38名しか広東水陸師学堂の資格試験に合格しなかったことを知った。その上、航海士の上級クラスは、たった14名を数えるのみであった。1889年に、37名の福州船政後学堂の卒業生が、広東水陸師学堂に移った。そして間もなく、天津から20名が加わった。そのなかには、広東水陸師学堂の陸軍課に往くものもいた<sup>8)</sup>。

1889年に張之洞は、湖南と湖北を管轄する湖広総督として武昌に異動させられた。この優れた教育指導者が〔新しい任地に〕出発した後、広東において「大事業がある程度阻止された」ことが観察されている<sup>9)</sup>。1891年に、約25名の生徒が名簿に記載された。教師は、中国人が4人と英国人が2人であった。同時代の観察者は、その学堂は水雷艇の訓練を専門に行っていたと陳べている。その学堂は、年間約1,000両を喪失していた。しかし、伝えられるところでは、かつて福

州船政局に関わったことがある〔閩浙〕総督譚鍾麟は、1893年までに、広東水陸師学堂の生徒名簿を90人まで削減し、後に30人まで削減した<sup>10)</sup>。明らかに張之洞が学堂を離れて以後、学堂は変動的になった。そして、反動的な剛毅が〔広東〕巡撫を務めた時期（1892-1894）に、学校は一時完全に閉鎖された。そして、広東艦隊は遊休化した。

南京では1889年に曾國荃が、桂高慶に促されて、〔桂が総辦を務める〕江南籌防局に江南水師学堂を創設した。江南水師学堂は、李鴻章の天津水師学堂に倣って創られた。しかし曾は、生徒数120名の学堂を開設して間もなく死去し、曾のあと两江総督を引き継いだ劉坤一は困難を抱えた。財政難のために縮小を余儀なくされたのである。そのうえ劉坤一は、1891年にもう一つの腹立たしい経験をした。北京の海軍衙門の指示で、彼の生徒は艦上訓練のため北洋艦隊に往くことになった。しかし李鴻章は、余裕がないと言って、南京の学生を引き受けることを拒絶した。こうして劉坤一は、彼の40名の学生と4名の教師を失い、水雷工場を閉鎖した。劉は、船がもつと沢山あれば（当時、空しい望みであった）、自分の学堂を再開するつもりであると陳べている<sup>12)</sup>。再開された江南水師学堂で、1894年に一人の英国人教師は、彼の生徒が書いた試験の答案が、英国海軍の生徒と同じ位に出来がよいことに気が付いた。しかしながら、第一期生は、日本との戦争が終わるまでには、卒業しなかった。世紀が替わって後、江南水師学堂の生徒については、とりわけ「政府の公務を避けるために、かなり一般的に広まった努力」が存在し、「彼等が不平を鳴らす種は、中国における公的経営として広く知られた物事と共に居続けることの中にある」と言われている<sup>13)</sup>。

清仏戦争と日清戦争の合間に、李鴻章は、彼の訓練活動を再編成した。1888年に、李は自分の海軍活動の全てを総理事務処の下に置き、北洋大臣の責任とした。李は1885年天津に陸軍の軍人を訓練するために、部分的には海防のために学校（武備学堂）を創設していたとはいえ、彼の最も重要な海軍訓練センターは、依然として天津水師学堂であった。旅順口には、地雷と水雷を扱う者のための学校があった。威海衛の港にある劉公島には、丁汝昌提督の下に海軍学校、すなわち威海水師学堂があった。新入生が登録されていたのは確かとはいえ、主に現職の再教育課程のための学校である<sup>14)</sup>。威海衛における指導者の一人は、アメリカ人のフィロ・マクギフン（Philo McGiffen）であった。アナポリス〔海軍兵学校〕の卒業生で、のち日本との海戦に従軍した。海軍の訓練は、大沽、山海関、北塘、威海衛における水雷・機雷設備において実行された<sup>15)</sup>。

今や二度目の中国勤務期間中のラングは、1890年まで李鴻章の海軍訓練システムを監督した。ラングは復帰するのを嫌がっていたが、ハートは彼の不平不満を説き伏せたのである。ラングの不平不満というのは、李鴻章に最初に仕えた期間中に積もり積もったものであり、張佩綸のような者たちから不作法な扱いを受けたり、彼の最初の指令が、北京からではなく、李鴻章だけから発せられた事実を含んでいた。李鴻章に再度仕えることになって、ラングは、彼が帝国の指令を託されること、訓練システムは英国式であること、彼が給与付きの助手を連れてくること、彼は李の艦隊組織及び海軍基地だけに責任を持つことを主張した。1886年3月にラングが復帰して間もなく、彼は帝国から提督に任命され、直ちに李鴻章の委任により北洋艦隊の教官となった。もちろん北洋艦隊には、既に提督の丁汝昌がいた。ラングはこの変則的な扱いに憤慨したが、ハートは、やはり大局観を持っていたので、彼に留まるよう説得した。ラングはその通りにした<sup>16)</sup>。そして、彼の仕事に精力的に身を投じ、顕著な成果を上げた。

天津水師学堂は、天津道台に直属していた。1888年に重役課（Executive Branch）と呼ばれた駕駛班ができ、福州及びグリニッジの元学生であった嚴宗光<sup>げんそうこう</sup>（嚴復）の監督下にあった。管輪班は、二人のイギリス人教員によって管理された。これらの外国人のうち一人は水雷課を始めたが、それは「近代の海戦に必要な不可欠なもの」を教えるための完璧な設備を備えていた。<sup>17)</sup>

李鴻章の1888年の海軍章程で試験に関する項によせた前文は、西洋における海軍アカデミーの重要性を強調していた。西洋では海軍の職歴は、多大なる名誉が与えられるのである。北洋艦隊はかなり大規模であったが、「各学生は少なくとも十年間の訓練が必要であることや、その途中で学生の約50%が（個人的理由や、臆病だからという理由で）脱落することを計算して、我々は広く学校を設立し、精力的に仕事をするよう学生を激励する必要がある<sup>18)</sup>」。

李鴻章の選抜する海軍学生は、（清潔な歯を持ち、身体に障害が無く）健康でなければならず、入学時に14歳以上17歳以下でなければならなかった。もう一つの必要条件として、彼らは「二三の経書」を読めなければならなかった。各人は、その父兄が学校に対する保証人を探すことが認められた。予備試験に合格すると、3箇月の英語学習に入り、その後もう一度選抜があった。最も優秀な学生たちは、海軍の幹部候補生として残され〔「海軍官学生」と名付けられた〕、公式の海軍訓練に入るために準備を行った。<sup>19)</sup>

李鴻章の訓練課程には、他の学校〔劉公島学堂〕からやってきた生徒もいたが、大部分は以前母校で学んだ天津〔水師学堂〕の卒業生であった。1888年に、道台は快速船をどうしても手に入りたいと懇願し、1881年から1888年までに李の天津水師学堂を卒業した30人の幹部候補生は、目下「実質的な給与」と「実質的な昇進」を得ていると報告している。1888年、別の9人の学生が卒業した。李の海軍アカデミーは、依然として小さなものであった。<sup>20)</sup>

1888年の章程の中で確立されたカリキュラムは、6年と7箇月に及んだ。そのうち27箇月は、海上の訓練船の中で過ごすべきことになっていた。諸課程は、福州船政学堂のそれと同様であり、定期試験に関しても注意深い規定があった。卒業生は、千総候補——ほぼ海軍中尉（sub-lieutenants）に相当する——に任命されることになっていた。ここに海軍のキャリアがそれなりに始まった。<sup>21)</sup>

李鴻章の訓練が発展するには、時間を要した。1893年、李は海軍衙門に対し、李自身が〔学堂での学業を終えた〕35名に対し最終試験を実施したところ、合格したのは三分の二だけであり、残りの者は出身地に帰したことを知らせた。<sup>22)</sup> 外国人達は、初等数学に時間を費やしすぎであり、もっと進んだ内容の教材を提供するだけの能力を備えた者により〔初等数学が〕教えられている、と感想を述べた。対日戦争中に書かれた論評は、沿岸地図の作成が、それほど進歩していないことを仄めかしている。<sup>23)</sup>

試験制度は、現職の司令官やその部下に実施される試験を含んでいた。彼等は、幹部と出版物に向けて、年に一度、海軍問題に関する文章を書く必要があった。賞罰は、部分的に、これらの試験の結果により決められた。李鴻章は、彼の練習生が、海軍の服務に帰属する意識よりも、文官勤務（civil service）に帰属する意識の方がまさるという事実に直面しなければならなかった。1888年に、数学が文官試験の公式課目として認められた時、李は彼の学堂の卒業生を総理衙門に派遣し、<sup>きよじん</sup> 拳人の試験を受けさせるという許可を得た。古来の文官勤務は、特に李の幹部候補生にとって、大きな魅力であった。李のシステムは、下士官兵の訓練のための入念な準備も含んでい

た。しかし多分、下士官兵のレベルでは、これら制度上の矛盾は、中国の未来の海軍指導者たちほど強くは感じなかったであろう。この点の詳細は、海軍将校の訓練について論じるつもりである。<sup>24)</sup>

報酬と罰則は、1888年の海軍章程の中に注意深く規定されていた。閲兵制度が最高潮に達するのは、総理海軍事務大臣が3年毎に行う全艦隊の閲兵であった（これら壮大な閲兵のために本人が海上に出る必要があった）。閲兵は、賞罰を与える機会を提供した。造船所の労働者や、或いは西洋の著作物を翻訳して有益と認められた者すら、〔3年に1度の〕周期的な施し〔を受ける対象〕の中に含まれていた。それは、海軍衙門の人員や北洋大臣の陸上施設に属する官員と同じ扱いであった。この規定は明らかに、中国の海軍官員の両眼が、地方の文官ではなく、北洋或いは北京海軍当局に期待通り留められることを確実にするよう設計されていた。海軍官員の多くは、南方にいた。そして南方は、李の海軍の艦長の多くが訓練された場所なのである。戦争のない平時において、勲章と昇進の体系は、3年に1度の間隔で等級が付けられることを基礎とするのであるが、戦時中、北洋大臣は、この間隔に顧慮せずに、昇進させることができた。昇進の基準となる詳細な規定を通じて、われわれは、彼等の選択した新しい努力分野で「専門家」になるべく、海軍官員にインセンティブを与えることの重要性を見出すであろう。<sup>25)</sup>

昇進に当てられた1888年章程の部分の前文は、イギリスの慣例に準拠しており、その本文は西洋の装いをしてしていた。官員は、三つの範疇<sup>はんちゆう</sup>、すなわち「戦官」、「芸官」、「弁目」に分けられた。各範疇は、それぞれ昇進ラインを持っていた。「戦官」は、グループに分けられた。まず「外海（外洋）」組が来て、遠洋戦艦〔鉄甲快船や魚雷艇〕に配属された官員から構成されていた。次に「外海常船（外洋通常船）」組が来た。その官員は、港の防衛、輸送、訓練に就いた。第三に、「内河（内海）」組があったが、この班は、内海でこの組に分類されるか、或いは陸上の船塢<sup>せんお</sup>（造船所）、学堂、機器局でこの組に分類される官員のために存在した。これら三つの甲板・戦列官員には、等差を保たれる給与比率<sup>しーり</sup>が異なっており、一つの組で累積された勤務時間は、別の組で蓄積された時間と自由に交換できなかった。「内河」における2年間は、「外海」船での上級任務のたった1年の価値を持つことができるに止まった。しかも、公海上で戦艦に乗っていた1年間というよりは、「外洋通常船」での1年間の価値を持ち得ただけであった。総じて言えば、あらゆる地位は、一つ格下から上をうかがう候補者によって満たされていたが、戦艦から来た者に優先権が与えられていた。都司（senior lieutenant）より上位に昇進するには、北洋大臣から皇帝に対し建言される必要があった。格上の参将（Captain）の地位に昇進するには、一つ格下の戦艦にたった3年間在職しただけで、候補者の資格が与えられた。

幾つかの独特な取り計らいがあり、興味深い。一つは、自分の地位より上位に空席が見つからない官員のためである。その官員は、たとえ候補者であったとしても、すなわちある一定の格付けをもち、開きができるのを待っている役人であったとしても、昇進して他省の任務に就くことが可能な者であった。章程は、西洋では海軍での昇進が一時的に停滞している海軍官員に対し、給与の増額がなされるとしているが、中国でこれを実行することはできなかった。他方、昇進させるべき適当な候補者が見つからないという正反対の状況においては、当時は「有用な人物」がその地位に試験的に就いたり、在職者が十分な給与をもらって〔兼務し〕、もう一つの勤務期間のために任務を続けたのである。<sup>26)</sup>

かくして、人は往ったり来たりした。もし適当な等級で文官に任命される可能性が生じるなら、海軍官員は彼の新しいキャリアを続けることを嫌がるであろう。すなわち、そのとき彼は海軍を離れ、後になって低い等級と安月給で、一種の海軍予備隊から、再び海軍に「借り」戻されるであろう。かくして、海軍を選んだ者は、〔海軍以外の〕<sup>は</sup>栄えある公務に帰属したいという希望を完全に否認する必要はなかったのである。他方、地方長官は、彼〔海軍官員〕の資格を北洋大臣に委ねることができた。そのときに北洋大臣は、提督に彼を推薦して海軍の務めに就かせた（こうした場合、北洋大臣に助言するのは、提督ではなかった）。そうした「功績のある」者は、3年間の見習い期間を減給されて終了すると、海軍の階級組織に吸収された。たぶん<sup>うまん</sup>胡散臭い<sup>らちがい</sup>栄誉を試してみた文官は多くはないが、李鴻章にとって有用であることが確実な者には、取り計らいの門戸を開いていた。かくして、南で訓練された艦長は、李自身の北洋の昇進システムの埒外に置かれていたが、李の旗下に入った。その取り計らいは、丁汝昌提督のような者に対しても、門戸を開いていた。丁が「海軍」での功績を持たず提督に就任したことで（彼はもと准軍の軍人であったが、李「自身の」部下の一人であった）、李が北洋艦隊のために提督を選ぶ際に、南の学堂から拘束されずに済むことが可能になった。

1888年の北洋海軍章程において、陸上の海軍官員は、彼らと対等の地位にある文官の礼服を着ることができた。その意図は、栄誉ある公務を賛美されない海軍軍務と連結することにあることは、規定の中にもっと詳しく示されている。<sup>27)</sup>

章程は、罰則を扱う部分も含んでいた。官員は平時の重大な違反により降格となるのだが、（給料の半分を返納して）自分で罪をあがなうことで自分の地位を維持できた。公務からも引き離された。さほど重大でない違反に対しても、細やかであった。平時における下士官兵の違反は、通常むち打ちにより罰せられた。戦時中の罰則は、更に嚴重であった。戦闘中の最も重大な手落ちや罪にたいし、罰則が提督により与えられた。それは、1726年版〔雍正四年〕の王朝法規〔清<sup>かいてん</sup>会典〕における戦時陸軍の懲戒部分により導かれたのであるが、その中から海軍の状況に最も適合すると思われる26個条が取り出された。26のうち18は死刑を求めた。そして、10は戦争の事態を扱っていた。それらの大部分は、敵軍と交戦するいかなる軍隊組織にも合理的に適用される。かくして、脱走、秘密漏洩<sup>ろうえい</sup>、臆病風、反乱の煽動<sup>せんどう</sup>に対し、死が指示された。条項の幾つかは、時代錯誤的であった。例えば、全ての弓、矢、矢筒、ナイフ及びそうした戦争支給品は、受け取った本人により保存されるべきであるとする命令がそうである。この昔の法典が過去からそのままリフトで持ち運ばれ、近代的な艦隊のために注意深く書かれた海軍規則の中に無理矢理押し込められたのは、多分そうした重大な物事においては、伝統が最もはっきりと物を言うからである<sup>28)</sup>う。

しかしその法典は、それが書き逃したことも面白い。訓練の問題は、皇帝の主な役割と想定されるのであるが、そうした記載はなかった。それ以上に、懇請するための条項がなかったし、或いは告発や専門的な証拠を取り調べる、海軍官員の組織体から成る常設機関のための条項がなかった。少なくともそうした組織体は、高度に専門的な立場で、ある官員が彼の任務を実行する、或いは彼に割り当てられた任務を遂行するために犯した失敗に伴う、道徳的可変性を勘案するであろう。ただ一つだけ明文化されたのは、参将で関わりのある者や提督が、装備の損傷について問い合わせるのが可能なことで、何かしら宮廷軍のシステムのようなものを連想させる。参将は、

幾つかの事柄で著しい自由裁量が与えられた。そして、全ての懲罰は、年に四回、提督により北洋大臣、地方公庫（給与を含めた問題について）、総督の軍事スタッフに報告されることになっていた。降格した記録は、北洋大臣により海軍衙門に送られた。皇帝を除けば、北洋大臣が究極の官廷であった。伝統的な審判システムが、高度に訓練された専門の海軍官員の意欲をどの程度まで失わせ、儒教的道徳観に偏向するたった一人の非専門家が審判の不当性についてどの程度まで気が付き、無名の人々による多くの提案に対してどの程度まで開かれていたかについては、ただ推測することができるだけである。

俸給は報酬の一形態であり、李の1888年の章程は、この点において詳細であった。西洋の慣例に従い、俸給は二つの範疇に分けられた。各自の俸給の十分の四は、官俸と呼ばれた。十分の六は、船俸と呼ばれた。この新しい体系は、養廉（ようれん anti-squeeze pay）のような、旧来の加給俸の全てを吸収するために立案された。二つの部分から成る俸給体系には、柔軟性があった。代理官員〔として船に随行した者〕が得たのは、彼らの等級に適う官俸の半分だけであったが、船俸は満額を手に入れた。一時的に陸上の職務を割り振られた者は、彼等の〔本職の〕官俸の半分が与えられたが、船俸は司令部の誰も支払わない。この種の様々な組み合わせが創られた。報酬表が含まれていた。提督の官俸は3,360両であり、船俸は5,040両であった。年俸の総額は、8,400両であった。総兵は、官俸は1,584両、船俸は2,376両であった。最も等級の低い官員〔経制外委〕は、一年に官俸96両と船俸144両を得た。もし柔軟な体系であれば、活動していないか、或いは虚しく保持しているだけの所与の等級を重視するよりも、海軍の職務に関する実際の功績も重視するであろう。

節約が望まれた。李鴻章は、章程の中で、いかに倹約が必要かについて説明した。彼が1888年の艦隊のための俸給を勘定したところ、年間の総額は66万9,100両に上った。その中には、艦隊技師や全艦隊の兵器検査官を含んでいたが、当時はその地位に実際に任命された者はいなかった。提督は、彼の官俸から一年当たり1,200両の俸銀を減らされていた。きっと他の官員たちは、同じ比率で同じような減給を蒙っていた。既に1888年において、李は6隻のうち4隻のアームストロング製砲艦を「退蔵」し続けていた。そして、これらの諸艦船からの官員は、鉄甲艦に送り込まれた。彼らは、転任により「代理の」資格を獲得したのではなかったようである。節約が定則なのである。<sup>29)</sup>

他方で、日清戦争を観察した信頼できるイギリス人の書き記したところでは、中国人の船員は定員の半分（half-strength）であったが、乗組定員の全員分の給与が支給されたという。<sup>30)</sup>

李鴻章の海軍に関する戦前の論評には、興味深いものがある。1886年の上海紙は、「強力な鉄甲艦（及び）高速水雷艇」と共に、北洋艦隊の非常に多くの活動を記録していた。艦船のうち2隻は、朝鮮で冬を過ごした。そこは「勇敢な司令官、礼儀正しい官員、行儀の良い船員達が、いつも大好きな」場所であった。「ラング提督」が「引き受けた」ので、ドイツ人の指導者は「即座に退職」となった。というか、米国公使デンビーは、そう報告した。デンビーは、上述した1886年の至急報も引き合いに出し、次のように陳べている。「北洋艦隊の舷側にいる人々は、自分の歯を敵にむき出して威嚇するよう求められれば、不幸な船員達が羅星塔（Pagoda anchorage）で行った（1884年8月の馬江の役）よりも違った量の奉仕をおこなうであろう。……いまや北洋の艦船だけが、現在東アジアの近海に配置されている他の全ての艦隊と単独で対抗できることは、

ほとんど疑いない。<sup>31)</sup>」

外国人の軍人も、おもしろい論評をしている。G・A・バラードは、著書の中で日本政治史における海洋の重要性について書いた当時、王立海軍の海軍中将であったが、後に1890年代における李の艦隊は「使える状態」にあり、「素晴らしく鍛えられ」、「しっかりした」訓練がなされており、倉庫や装備は、陸上と海上の何れも「確立するに至っている」と記録に残している。外面的には、船は「洗練されていて清潔である」、そして内部は、「正常に運転できる状態である」。不断に巡航することで、船員達の敏捷性を維持させている。「あらゆる点で」、彼は、「その艦隊は、上っ面だけ見れば、侮りがたい勢力を代表していた」と回想している。<sup>32)</sup>

中国の保守派は、外国式訓練の影響で腐敗が進行すると同じ事をくどくどと陳べた。<sup>33)</sup>他の外国人レポーターは、改善の余地があると提案する報告を行った。1888年に福州の英国領事パーカーは、シンガポールへの巡航から戻ったとき、当地で丁汝昌提督の船に電話をした。パーカーは、(彼が遂に旗艦を見つけた時)制服を着た船員が漕ぐ領事の舢舨サンパンの中で、提督まみと見えるよう要求したが、甲板の官員は「どちらの提督」を望んでいるのか戸惑った。いずれにせよ、その時ラングと丁は、二人とも外出中であった。その時、パーカーは官員が正式の制服を着ていないと異議を唱えたにもかかわらず、その官員は、パーカーに礼儀正しく礼砲を行おうとした。それでも、中国人官員はマニュアルを調べ、パーカーは、船載ボートで(火力の及ぶ範囲の外に)ゆっくりと離れ、時間的余裕を得ることにした。何も起こらなかった。細心なラングは、次の日の午後に礼砲が正式に放たれたことを見届けた。<sup>34)</sup>外交儀礼は、訓練と密接に関連しているのである。

「どの提督」と言う問題は、ラング「提督」には冗談にならなかった。実際、その問題が原因で、ラングは辞任した。辞任は1890年8月であるとはいえ、最後のトラブルの正確な日付は、よく分からない。1880年代末に北洋艦隊が南巡した際に、丁汝昌は香港に寄り道するために彼の旗艦を置き去りにした。丁が不在の時に、ラングは彼自身の旗を揚げたのであるが、その旗艦の艦長である劉歩蟾りゅうほせんは、自分が現時点でより上級の官員であると考え、ラングの旗を引き下げ、自分の旗を高く掲げた。ラングは侮辱されたので、帝国の委任に基づき彼の地位が提督であることに言及した。劉は、そこまで等級は高くなかった。しかし、その騒ぎが李鴻章の注意を引いたとき、李は劉歩蟾を支持した。ラングは、怒って辞任した。<sup>35)</sup>

ラングは、彼の任務を真剣に行っていた。タイラーは、ラングは「副司令官から提督の等級の付いた顧問までの何かを意味する曖昧な中国形式の中で」権威を持っていたと陳べている。ラングは、彼は丁汝昌の副司令官であると信じていた。丁は、ラングを提督の等級を持つ顧問36)と見なした。外国人提督に関する——実は、提督それ自体に関する——中国側の見解は、1895年に張之洞によって例証された。そのとき張之洞は、中国艦隊を訓練するため、ラングに中国に戻ってもらえるよう三度目の試みをしていた。張は総理衙門に打電し、提督の肩書きをラングにとって魅力的なものにするよう提議した。張は、提督の肩書きはイギリス人には高く評価されているが、中国人には高く評価されていないと陳べた。<sup>37)</sup>

ちょうど議論されていた旗事件は、北洋艦隊の中で別の緊張状態を現している。1886年に李鴻章の配下にあった福建人艦長の林泰曾は、ラングを中国に呼び戻そうとするハートの努力を支援していた。しかし、ラングが復職すると、彼の訓練が厳格なことが分かった。そして、それ故に、とりわけ福州船政学堂の官員の間で不人気になった。何故なら、彼らの訓練は、おそらく既に仕

上がっていたからである。必然的に、南洋人の恨みは、幾分かは李鴻章自身に向けられた。李は、結局ラングを雇い、仕事を継続させたからである。劉步蟾は、南洋系の派閥の一員であった。そして、彼のフラッグ・スイッチは、李鴻章の注意を引くために急遽こしらえた合図、すなわち不満の身振りなのかもしれない。丁汝昌提督は安徽<sup>あんき</sup>の出身であったが、南洋の近代的訓練を受けた官員グループから孤立していた。旗事件で劉の激昂を抑止できなかったのは、明らかに丁の威信が乏しかったからである。<sup>38)</sup>

李鴻章と共に経験した出来事に関するラング自身の要約は、怨恨からほとんど自由ではないとはいえ、明らかになっている。ラングは、彼のフラストレーションについて（第三の男に託して）次のように書いた。

一部の批評家は、李鴻章が何でも手に入れたがること、そして、一つの艦隊を指揮できるのに、海上任務や文官行政の経験がないことを忘れがちであることを仄めかしている。彼は、無知で嫉妬深い者たちによって通路に投げられた障害物にうんざりしていた。総督〔原註：李鴻章〕自身が海軍の邪魔をする者に用心深く警戒しながら、彼は、中国人の中で、総督以外の誰一人として海軍に現実的な興味を持っていないと感じていた。認可された全ての物事が、絶大なる賛同を与えられたかのように実行されるのに、時折、適切な供給物を得ることに、彼はひどく苦心した。<sup>39)</sup>

それは、英国では全くあり得ない状況であった。

中国が1890年にラングを失ったことは、重要である。直接の結果は、英国海軍学校から中国人学生が排除されたことである。更に、ラングの離脱後、訓練が退歩したという証拠がある。1891年7月に北洋艦隊は横浜を訪問したが、決して軽々しい気持ちで訪れたわけではない。姉妹艦の「定遠」と「鎮遠」は、日本海軍の仲間内で、少しも注意を喚起しなかった。日本艦隊の東郷〔平八郎〕は、鋭敏な好奇心をもって旗艦「定遠」を調査した。しかし、丁汝昌提督が驚愕したのは、日本人の訪問者が「定遠」を全く賞賛しなかったことである。当時横浜海軍基地の司令官であった東郷から見て、船員達は訓練不足であった。大砲は清潔でなかったし、そのうえ洗濯物がぶら下がっていた。東郷は兵器をそんな風に取り扱う海軍に感銘を受けなかった。<sup>40)</sup>ラングなら、そうしただらしなさを決して許しはしなかっただろう。

丁汝昌提督は、海軍の専門家ではなかった。そのうえ彼は、そのことを認めた最初のものである。タイラーは、丁が高価な水雷を台無しにしたばかりの外国人「専門家」を譴責したエピソードについて、以下のように詳しく陳べている。「水雷の損失は、それほど重大ではない。というのも、不幸にしてそれらを使用する機会がほとんどないからである。しかし、わたしがこの事件について好ましく思わないのは、あなた方が専門家であると見せかけていることである。ここでは、わたしが艦隊の提督である。わたしが見せかけているのか？ わたしが船や航海について何か知っているふりをしているのか？ ご存じのように、わたしはそうではない。だからわたしを見習って、これ以上偽るな。」<sup>41)</sup>

海軍を真に専門家の任務にするという問題は、そうしたリーダーシップの下では容易なことではなかった。E・H・パーカーは、鄧世昌の親しい友人であった。鄧は、李鴻章の福州船政学堂

で訓練を受けた艦長の一人である。パーカーは、鄧と大いに話をした。彼の戦艦である「揚威」は、常に清潔であった。それに鄧は、油や塗料の上を無理に進まなかった。彼の多くの特性には、外国人の猿真似は含まれていなかった。すなわち、椅子にだらしなく座ること、タバコをプツとふくこと、突然高笑いしだすこと、空想的な会話を始めることである。鄧は身を粉にして働き、野心を持ち、愛国者であった。パーカーは、鄧は高度に「数学的な理解力と海軍の才能」を持っていると感じた。しかし、鄧が彼の能力を活用するのは困難であった。パーカーの結論は、次のようであった。「わたしは丁提督と鄧参将の間に存在する関係が全く分からない。しかし、わたしは、勇敢な提督が、勇氣ある男であるにもかかわらず、ひどく無能であることをよく知っている。そして、わたしは、鄧参将が、提督の志望目標に絶望して、多くの苦々しい時間を思案することに費やすと確信している。」

一人の観察者は、そうした問題について次のように陳べている。中国と日本の海軍は、何れも英国人により訓練されたが、日本人だけが言うことを聴いた。<sup>43)</sup>その論評は、言い方を誤っている。すなわち、中国人と日本人を訓練することに関して、制度的な側面で相違があることを見落としている。李鴻章ですら、海軍を中国で尊重される専門職或いはキャリアにすることができなかった。外国人はその問題を以下のような言葉を使って、中国の新しい海軍官員について陳べている。「彼等は、中国官僚の観点からみればアウトサイダーであったが、寛容に扱われねばならなかった。なぜなら、海防の切迫した事態が発生し、海軍が必要となったからである。」<sup>44)</sup>李の艦隊の中で最も訓練された者は、南洋出身と言うことでいっそう孤立させられ、貧弱なリーダーシップと旧式の艦隊によってハンディを負わされた。しかしながら、最も近代的な艦船であったとしても、本質的に、中国においてずっと受け容れられる体制として近代海軍を構成しなかったであろう。

#### 註

- 1) 昆明湖水師学堂は日清戦争まで存続しなかったにもかかわらず、重大な意義を有した。1887年に、沿海及び河川の視察後、醇親王は、京師の近くに学校を設立し、満人に海軍の技量訓練を行うよう求めた。その学校は、頤和園の近くにある昆明湖に設立され、1887年の末か1888年の初めに開学された。学堂は、天津水師学堂の章程に倣った。当初は60名の学生が集められ、〔選別されて〕残ったのは40名であった。第一期生は1892年に〔35名が〕卒業し、天津水師学堂に進学して学習を続けた。1893年に、この第一期生は休暇を与えられたが、休暇が終わった後に昆明学堂に留まった者〔24名〕も居れば、〔成績不良のため〕八旗に送り返された者〔11名〕も居た。1892年に44名（明らかに、やはり全員が満人）から成る第二期生が招集されたが、戦争後に海軍衙門は昆明湖水師学堂を閉鎖するよう申し入れた。多分清朝は、身内の者を幾人かは李鴻章の艦隊に潜入させることを望んだであろう。包遵彭『中国海軍史』（台北、1951年）232～233頁。
- 2) Knight Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, Ithaca, 1961, p. 222.
- 3) 『船政奏議彙編』巻31, 1～5頁, 1886年1月14日付。〔訳註：左宗棠が1866年12月に取り纏めた「船政章程」の中に、求是堂芸局で学ぶ子弟の学問が成就し、「監造」や「船主」となった場合、毎月の薪水は、外国人の「監工」・「船主」の「辛工銀数」に照らして発給されるとの一項がある（『左文襄公奏稿』巻20, 67～68頁）。この史料で、船政大臣は、この章程に依拠して御史に反論しているのであるが、その文面を見る限りでは、帰国した留学生を対象にした規定ではないようである。〕
- 4) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, pp. 237-239. 『船政奏議彙編』巻32, 4～6頁, 1886年5月10日。〔訳註：北洋水師の学生の中から選ばれたのは、陳恩燾、劉冠雄、曹廉正、陳燕年、黄裳吉、伍光鑑、鄭汝成、陳杜衡、王学廉、沈寿堃の10名。このうち北洋に差遣さ

- れた黄裳吉が外され、残りの9名が派遣された。福建船政局から選ばれた駕駛学生は、黄鳴球、羅忠堯、賈凝禧、鄭文英、張秉圭、羅忠銘、周猷琛、王桐、陳鶴潭、邱志范の10名。製造学生は、鄭守箴、林振峯、陳慶平、王寿昌、李大受、高而謙、陳長齡、盧守孟、林志榮、楊濟、成林藩、游学楷、許寿仁、柯鴻年の14名。留学生を引率した監督は、道員の周懋琦である。]
- 5) 『船政奏議彙編』卷33, 3～5頁, 1886年7月17日付。
  - 6) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, p.239.
  - 7) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, p.224, pp.226-227. それに, “Naval Colleges in China,” *Engineer* (June8, 1900), pp.600-601.
  - 8) 包遵彭『中国海軍史』(1951年)227～230頁。Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, pp.54-55, p.227.
  - 9) “Report for the Year 1889 on the Trade of Canton,” p.10, *British Parliamentary Papers*: “Diplomatic and Consular Reports,” 1890-1891, Vol.85.
  - 10) *Imperial Maritime Customs: Dec. Reps., 1882-1891*, Canton, p.576; “Report for the Year 1888 on the Trade of Canton,” p.9, *British Parliamentary papers*; “Diplomatic and Consular Reports,” 1889, v. lxxvii. 包遵彭『中国海軍史』(1951年)230頁。
  - 11) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, p.56.
  - 12) 包遵彭『中国海軍史』(1951年)234～236頁。劉の報告は、『清季外交史料』卷84, 25～27頁, 1891年7月28日付。
  - 13) 「海軍学校」600～601頁。
  - 14) 包遵彭『中国海軍史』(1951年)233～234頁, 243頁は, 威海水師学堂について議論している。広東から来た新入生の中には, 南洋で巡航した後, 北洋艦隊に呼び戻された者がいた。あるいは李鴻章は, 威海水師学堂を, 天津海軍学堂〔での彼らの学習〕に備えるために, そうした新兵の徴兵検査場として利用したのかもしれない。
  - 15) 李鴻章の様々な学校に関する詳しい議論は、『北洋海軍章程』第一冊の第7条, 第二冊の第5, 8, 14条。『皇朝政典類纂』卷342, 9頁。池仲祐『海軍大事記』336頁。包遵彭『中国海軍史』(1951年)233～234頁。E. H. Parker, “Militaryism in China,” *China Review* (Sept-Oct. 1885) p.109.
  - 16) Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, Belfast, 1950, pp.480-481. ラングは, その仕事ぶりを李鴻章と醇親王から賞賛された。『清季外交史料』卷66, 16頁, 1886年5月20日付。
  - 17) デンビーからベイヤードへ, 1888年5月11日付, *Foreign Relations of the United States* (1888), I, 301-303. アカデミーの組織に関するより詳しい知見は、『北洋海軍章程』第二冊, 「雑費」。
  - 18) 『北洋海軍章程』卷二冊, 1～6頁, 「考校」。
  - 19) 同上。〔訳註：訳文中, 「身体に障害が無く」の部分は, 原書では, “tuberculosis” (結核症) とあるが, 『北洋海軍資料匯編』(下)930頁に「身無廢疾」とあるので, これに照らして翻訳した。〕
  - 20) 池仲祐『海軍大事記』342頁は, 1895年に直隸總督王文韶〔任期:1895年8月(実授)～1898年6月〕が, 劉公島学堂を未だ卒業していない学生を天津水師学堂へ送り出したと記している。快速艇については, デンビーからベイヤードへ, 1888年5月11日付, *Foreign Relations of the United States*, (1888), I, 301-303. この文書は, 日和見的な直隸の道台にして学堂の支配人である Sin による, 時報(1888年4月30日付)での声明文に基づいて書かれた。
  - 21) 『北洋海軍章程』第二冊, 「考校」。
  - 22) 『海軍函稿』卷4, 22頁, 1893年8月25日付。包遵彭『中国海軍史』(1951年)231頁は, 18歳から30歳までの卒業生の数を与える。
  - 23) カリキュラムの基本的性質については, デンビーからベイヤードへ, 1888年5月11日付, *Foreign Relations of the United States*, (1888), I, 301-303. 地図作成作業に関する論評は, 遠回しであった。日本の海軍官吏は, 黄海と朝鮮の地図は, アメリカ製が最も有用であると陳べている。“Bibliographical Notes,” *United States Naval Institute Proceedings*, 21.4: 860 (1894). Biggerstaff,

- The Earliest Modern Government Schools in China*, p.239. は、1886年にヨーロッパに行った海軍学生のうち二人は、地図作成法を学んでいると陳べている。
- 24) 『北洋海軍章程』二、「考課」は、下士官兵に関する条文を含んでいる。挙人に関する記事は、Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, p.182.
- 25) 閱兵、賞罰に関する記事は、『北洋海軍章程』第二冊、「簡閱」から参照のこと。この「簡閱」には、南北合同演習に関する記事も含む。
- 26) 『北洋海軍章程』第一冊、「升擢」。
- 27) 『北洋海軍章程』第一冊、「儀制」。
- 28) 同上「軍規」。26個条については、4～7頁。
- 29) 同上、「俸餉」。
- 30) W. Laird-Clowes, "The Naval War Between China and Japan," Brassey (1895), pp.90-126. 声明は、同書の116頁。
- 31) デンビィからベヤードへ、1886年5月14日付, *Foreign Relations of the United States* (1886), pp. 83-84.
- 32) Ballard, *The Influence of the Sea on the Political History of Japan*, New York, 1921, pp.135-136.
- 33) 『海軍函稿』巻1, 29～30頁, 1886年7月16日付。別の種類の腐敗は、海上訓練プログラムに関係していた。1890年に裴陰森は、海上に居続けた学生グループに報酬を与えるよう提議したが、リストには海上にいなかった福州船政局の人員も含まれているのが判明した。王松辰は総辦を補佐していたが、追加分を偽造したのである。『船政奏議彙編』巻43, 6頁。
- 34) Parker, *John Chinaman*, pp.241-244.
- 35) Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, pp.481-482. Parker, *John Chinaman*, pp.251-252.
- 36) Tyler, *Pulling Strings in China*, London, 1929, p.36.
- 37) 『清季外交史料』巻106, 13頁, 1896年2月16日付。
- 38) 池仲祐『海軍大事記』334頁。姚錫光『東方兵事紀略』197頁。もう一つの興味深い意見は、ラングの背後にいた人物は、方（伯謙）であり、北洋艦隊における強力な南洋派の一員であったことである。H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 67.
- 39) Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, pp.481-482.
- 40) Edwin A. Falk, *Togo and the Rise of Japanese Sea Power* (New York and Toronto, 1936), pp. 131-132. [訳註：馮青『中国海軍と近代日中関係』錦正社, 2011年刊, 42～43頁は、日本側の史料を使って北洋艦隊の日本訪問について論じている。]
- 41) Tyler, *Pulling Strings in China*, p.89.
- 42) Parker, *John Chinaman*, p.259.
- 43) Herbert, "Lessons", p.696.
- 44) Alfred Cunningham, *The Chinese Soldier and Other Sketches* (London, n. d.), pp.30-31.

## 〔付記〕

一、原著者による註釈は〔原註：〕として訳文を書き込んだ。翻訳者による註釈は〔訳註：〕として書き入れることにしたが、本文中では煩雑になるのをさけるため、多くの場合「訳註」の二文字を省いた。

一、翻訳に際して、中華文化復興運動推行委員会主編『中国近代現代史論集』第八編 自強運動(三)軍事、台湾商務印書館、1985年、に収められた諸論文、それに包遵彭『中国海軍史』（中華叢書）下冊、1970年、を適宜参照した。

一、池仲祐『海軍大事記』『甲午戦事記』は、原著者の使用する左舜生編『中国近百年史資料続編』（上下二冊）、中華書局、1933年、に所収のものを参照した。

一、『北洋海軍章程』は、翻訳に際して、謝忠岳編『北洋海軍資料滙編』（下）、中華全国図書館文献縮微複製中心、1994年、に所収のものを参照した。ところで、本書に影印収録された『章程』は、原著者が使用した原本とは異なるようである。それで、本文の記述に対応する部分と突き合わせて訳文の精確さを期そうとしたものの、両者の構成と内容が必ずしも一致していないため、作業を徹底できなかった。部分的に検討不能の箇所も生じた。